

集帖





嘉永三庚戌春

歳旦

み水や南

初舞の春のつれ

法昇堂

五



春鳥

五風

春の鳥の鳴く声

鶯

五

春の鳥の鳴く声は



春の鳥の鳴く声

五



東天

春の鳥の鳴く声

春の鳥の鳴く声は

春の鳥

柳の葉の青さ

五風

春の鳥の鳴く声は

春の鳥

五



長久保御舟

妻真

長山女

佐保船の神の権座うぶの跡

兼書

立

〜の尾中島まふ家の人出入



明来

三草
兼調書

裾く〜石二のおのり玉 帰周

駕り〜の〜む物書 五空

酒〜〜〜酒海音新よ酢の利々 古山

三



長文古用事

其具

時局

静々の葉を舞うるや美の心

栄華

立

機巧の立ちしは流石の傑なり



繁天

芳水書

花や静寂をそよめる美 枕邊

花の匂ひは水 五空

石の跡も静かに伝ふる 巻末



長久寺園景

来鳥

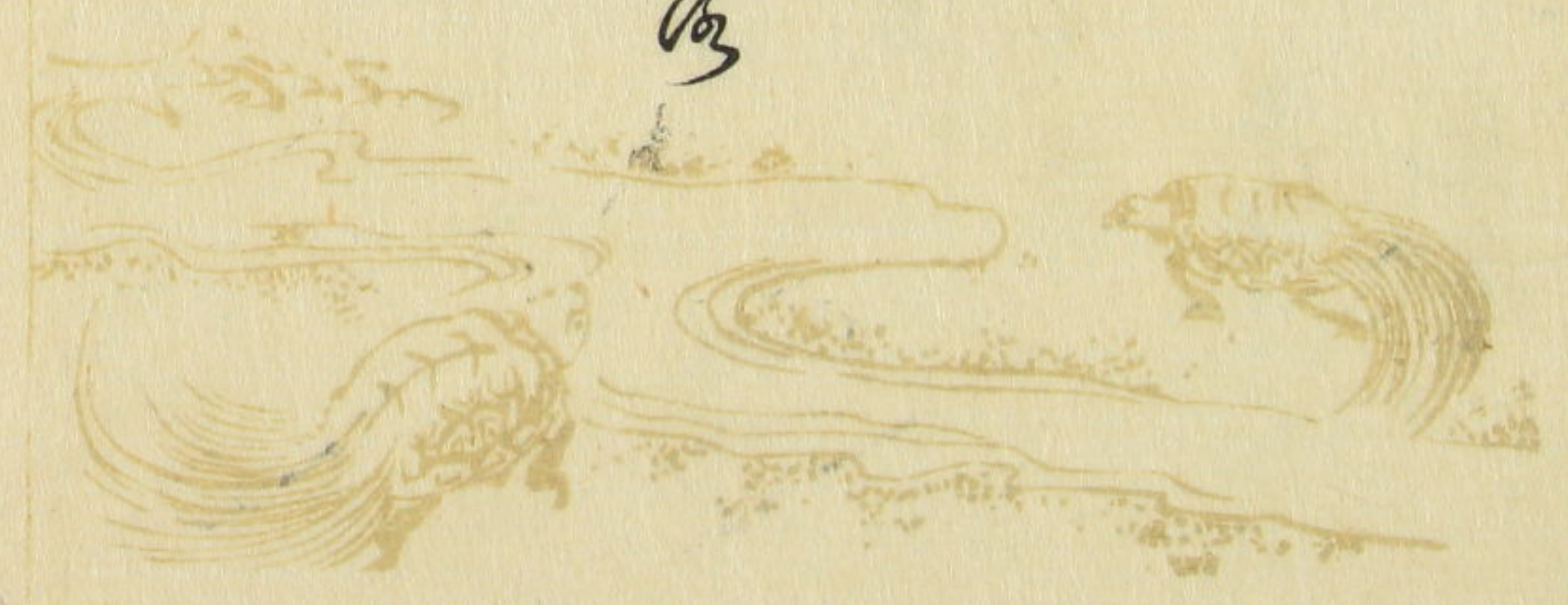
来鳥

くわくやうきりぬくひさ

来鳥

五

大年やあきとあきく入地



三始

北井

えりやりのあきとあきく入地

五同

居るあきとあきく入地

五同

あきのあきとあきく入地

古久



長久寺僧寺

唐五

美鳥

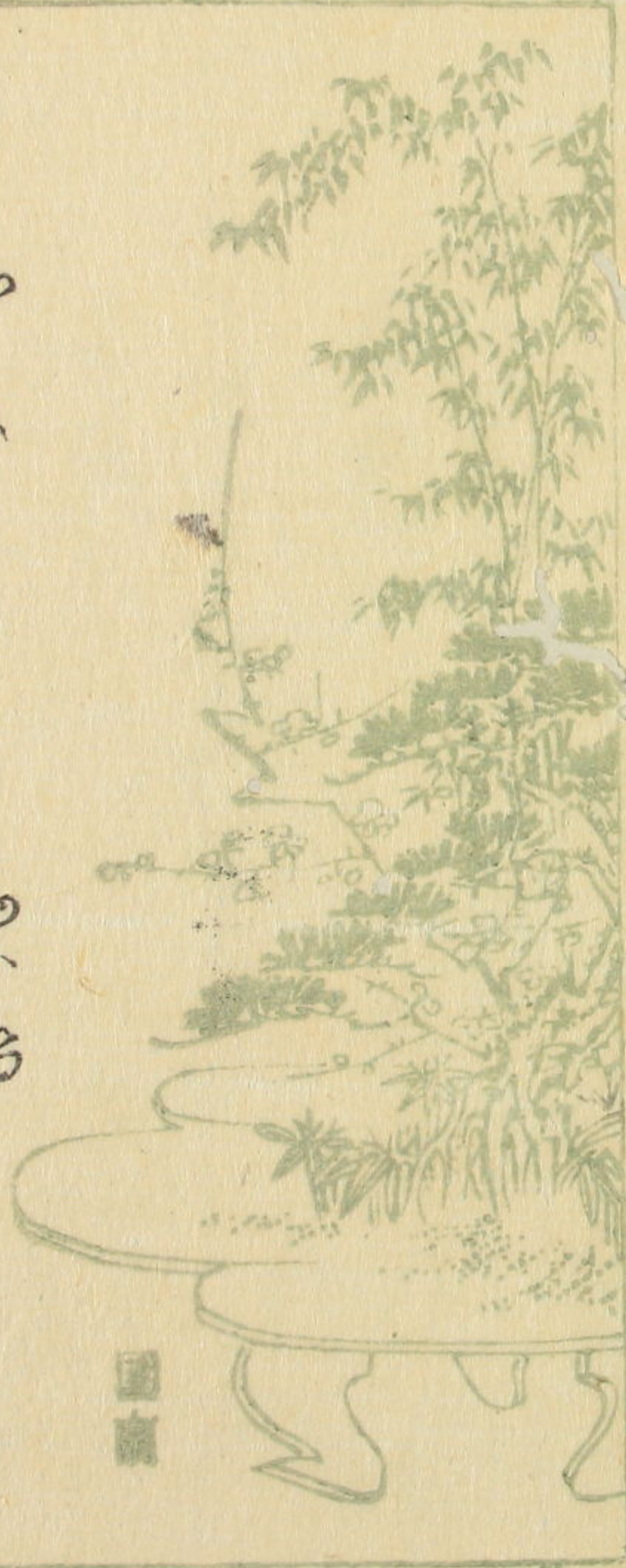
五鳥

大伊の物ゆけらる小伊哉

衆言

立

徳分事も移りゆく徳事の徳



和系

和系

光つゝ子鳥も春やまのま

柘光

船の勝の舟もあまの

五鳥

舟の舟も輪をひねのふ

美柘

唐五

長文事留景



其鳥

割之勢も言はれぬ切り身

歳書

この尾中澄らるる若の飯

相光

立



年始

折

之もよもよ色むり居持

湖も斜る居種と濁る

城の境も本原ちの葉は

柳書
能書
能書

五片

雅定



長久寺

唐

真鳥

作鳥

鳥書くは鳥書くは鳥書くは鳥書くは

崇善

立

中平中平中平中平中平中平中平中平



年

新

鳥書くは鳥書くは鳥書くは鳥書くは

立

鳥書くは鳥書くは鳥書くは鳥書くは

立

鳥書くは鳥書くは鳥書くは鳥書くは

立

唐

美具

好雪

元徳三年三月八日

山景

立

静海の清



湯中

弓子亭

静の舟中

舟中

舟中

長史字用泉



美奥

山

り美也かかか一年の

棠

立

より接り、美の母を



悪天

古

流の静りありし

現るは

五

中

端



陽庭

耕祝書

光るゝの庭を縁を中務所 柱木

の庭情を木のくみ 五月

観望の庭へと物も其ゆき 葱松



真鳥

一映

鶴の傍の〜の字や

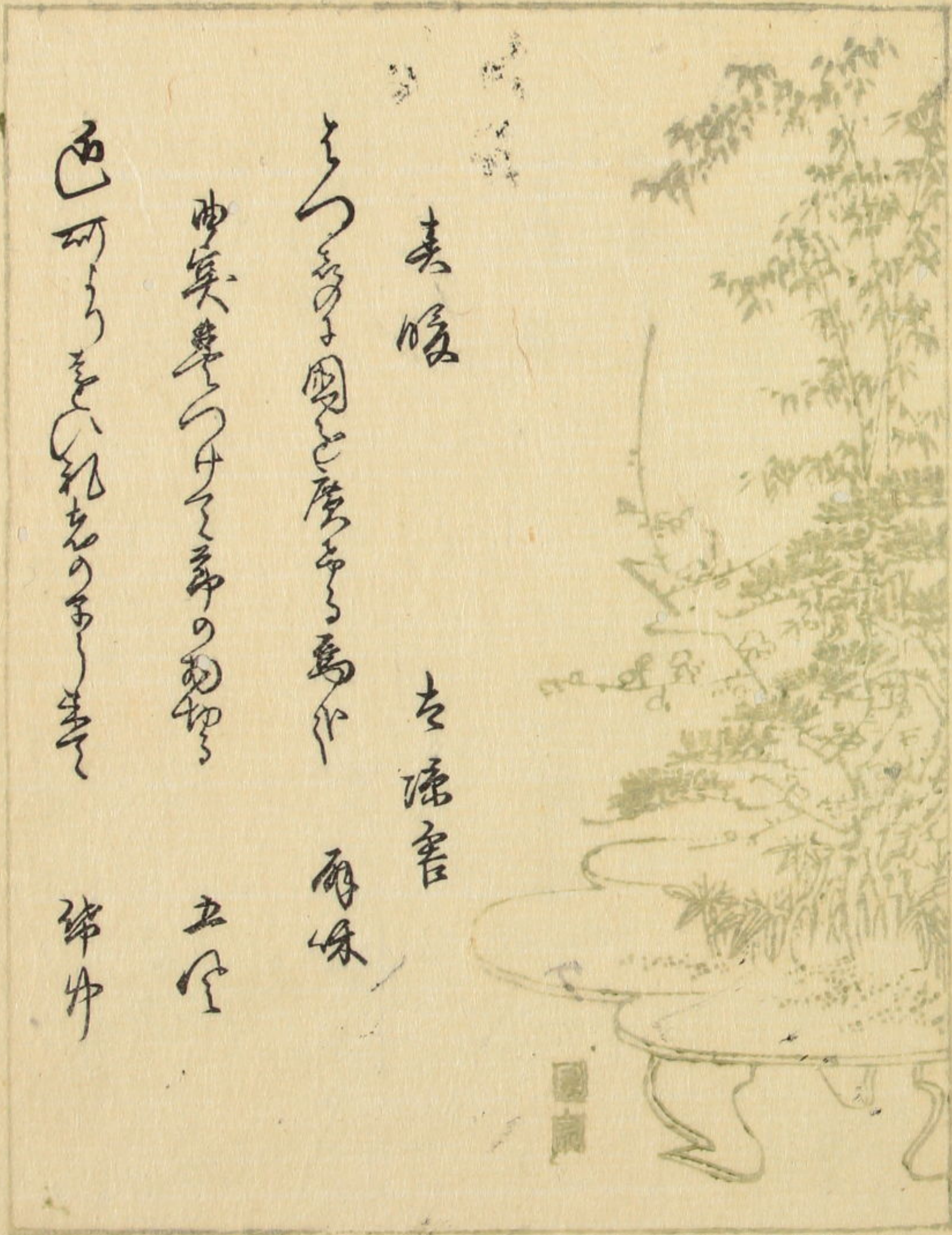
栄書

立

〜の〜の〜の〜の

長文書目録

成王



素履

左 漆書

とつた子園と居る鳥

雨味

曲実をのけそ帯の物

五斗

西の可なりまの志のま

瑞井

長文



長文

素履

左 漆書

とつた子園と居る鳥

雨味

五斗

西の可なりまの志のま

瑞井



長文書目録

三十一

其奥

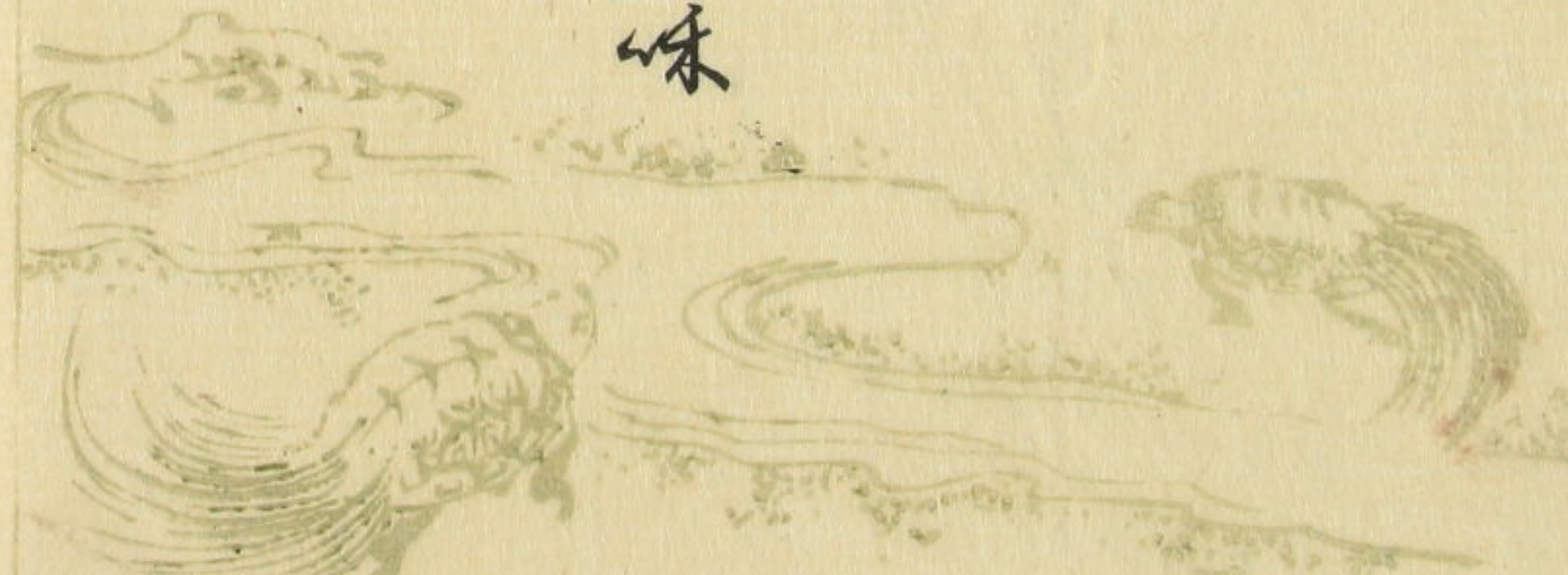
有味

山海谷足分り中其の山

兼善

立

年の屋中其の若の所より



立者

大福殿

より其の中其の若の所より

受中

善也入江の廣に懐

五合

甲揚り小揚りより其の所より

古山

三十一

美與

翠子

明くくそよそつ言や露りか

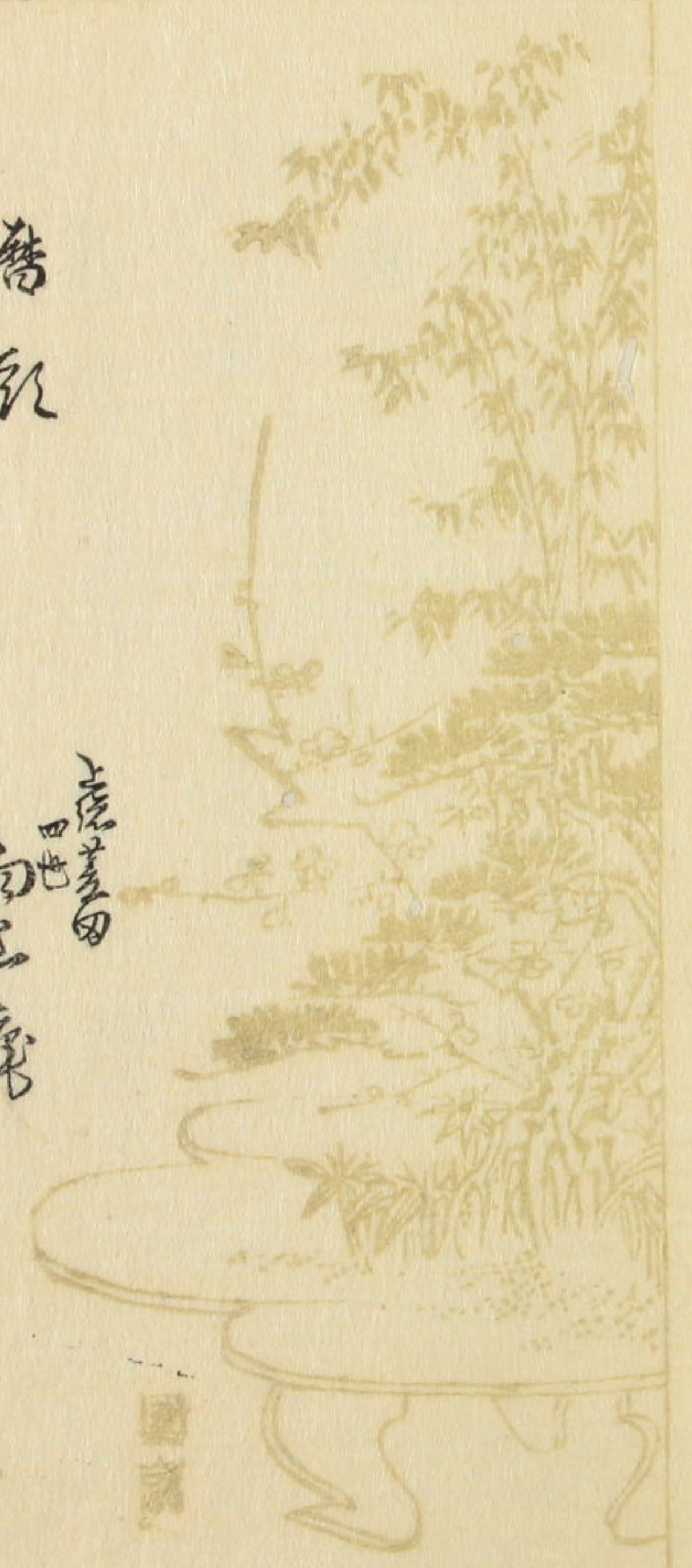
紫書

立

秋のそよそよの言



秋のそよそよ



紫書

上徳堂
白子庵

新くそよそよの言

大なるそよそよの言

五のそよそよの言

紫書

海
山
山



其具

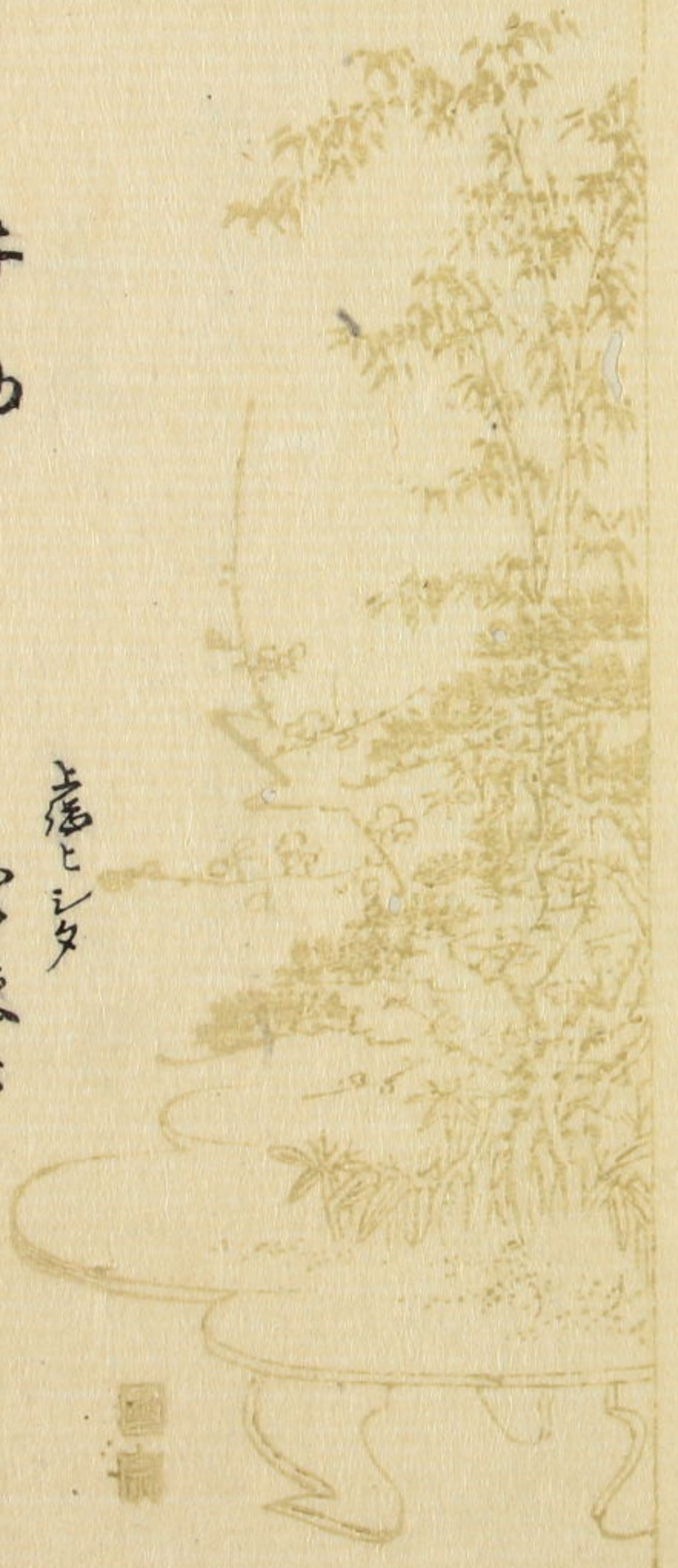
一浩

まのけしきくまのついで

歳暮

立

大徳のやまのきくまのついで



遠く

年物

知酸糸

暮のきくまのついで

暮のきくまのついで

五

雨のきくまのついで

黄

山



美鳥

一考

笑ふもの人なきや美の月

歳言

立

湖へ飛ぶ鳥と中作生鳥



唐歌

浪西歌

雲のそりそりたるは雲を中作生鳥 一考

神を辨へば雲白くしり

五考

こぼるる雲のそりそり

古歌

鳥居



長久寺園景

喜鳥

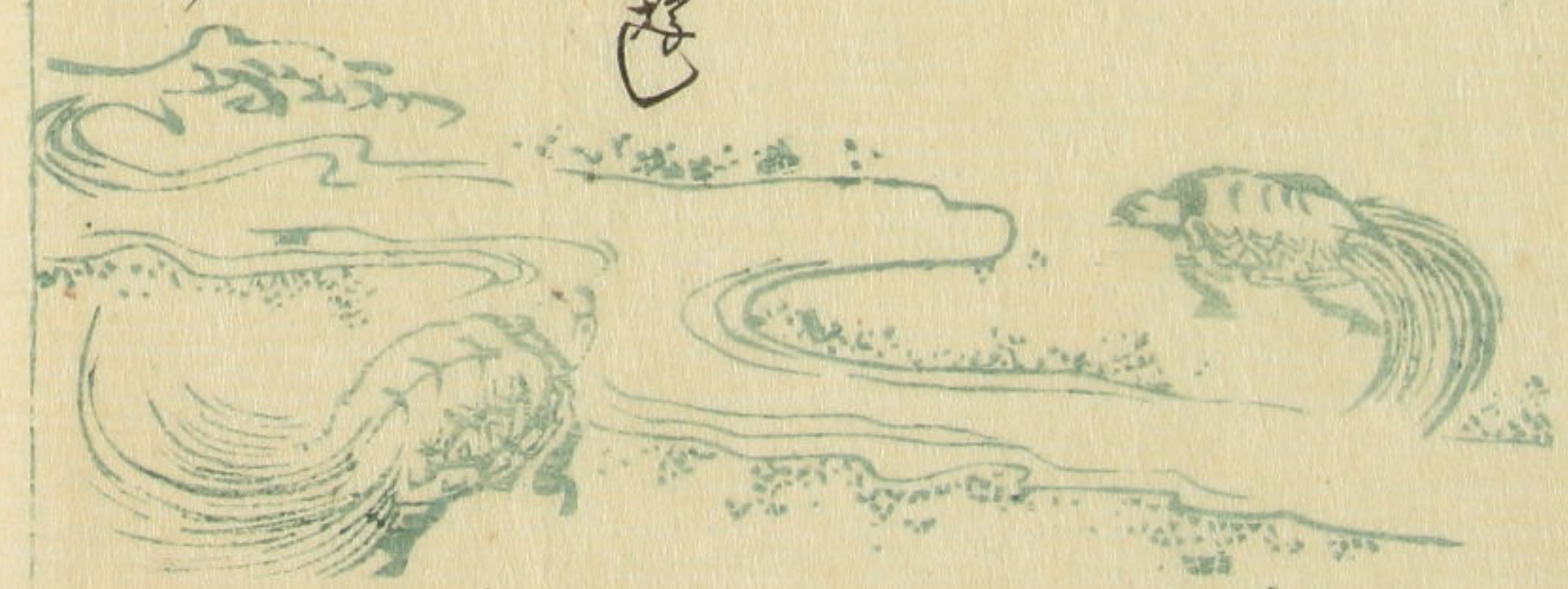
一遊

妙宗くは信や昔のあそぶ所なり

山景

立

年の尾や信のゆきつと七五三修り



園景

東明

松林景

とつ新を修りゆきや布衣の足

樂成

書の手と祝と居る意

五空

山角の鳥を修りゆきや

伴中

序十七

長文亭圖景



来鳥

来枝

露のこころを素花の結ぶ糸の端

来書

立

今更のこころを結ぶ糸の端



清心

来書

静かなる心は清くも素直なり

来境

あはれを静かに知る心

五行

静かなる心は清くも素直なり

古境

國威



泉音

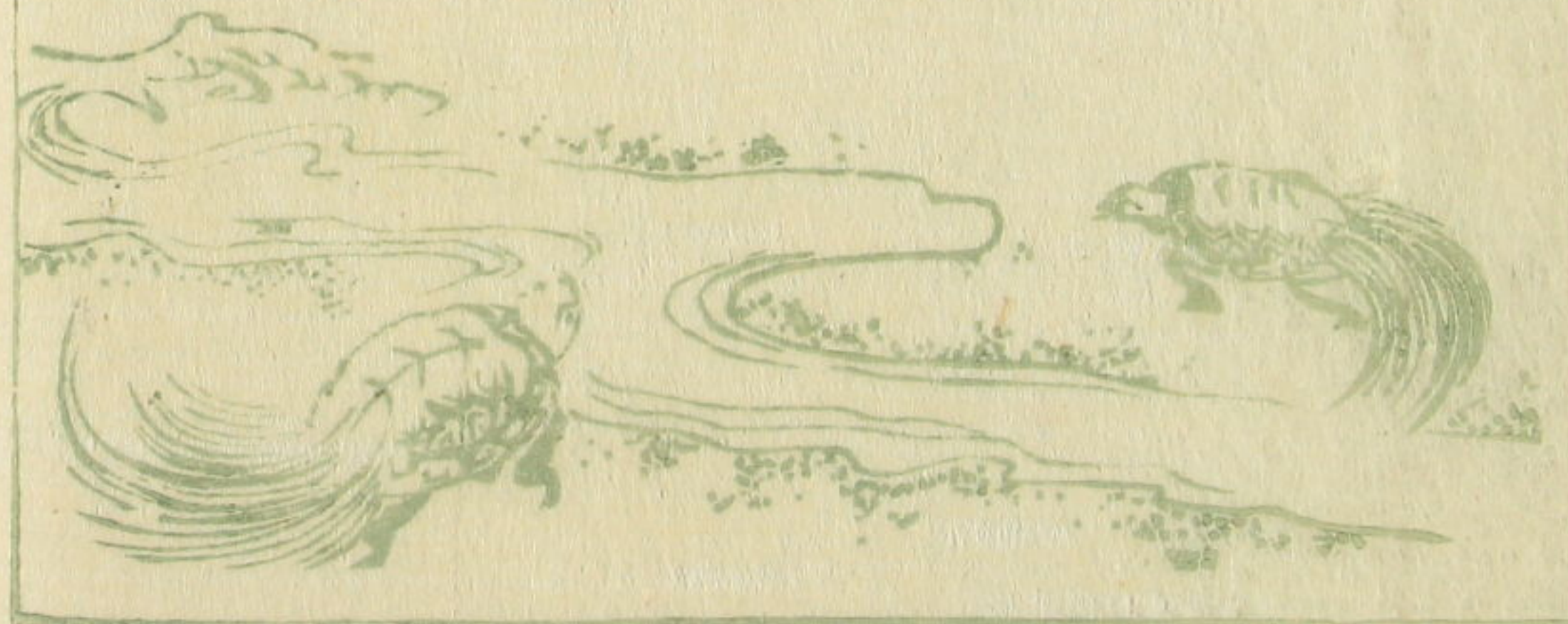
あけのつとむら

虎境

心はせしむるまゝに

長文書目録

唐千八



春如

法教書

岡中

只率一物と云ふもあらた

あまのつとむら

五全

舟揚る朝の蝶もほろろ

程立

園南

清江
白雲
翠嶺
綠水



長文
三層
景

美具

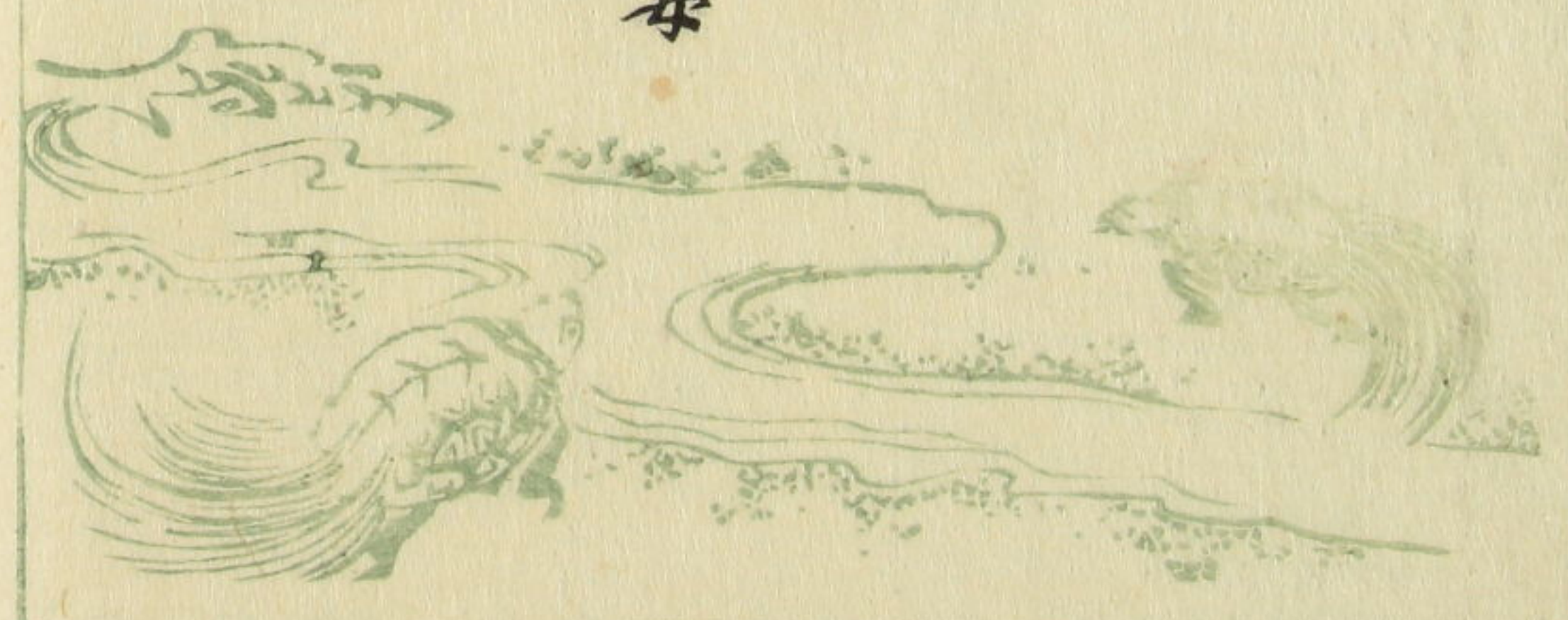
園中

浮紗や信るる所 露の凡

栄草

立

竹葉と揺るや海草は花



東平

星海亭

芳代と暮るる所 竹の傍 此所

礼名あらしの流るる色

五月

竹艘も入物よ風のそららん

古山

長文寺
御
願
成
願
成
願
成

長文寺



其鳥

其鳥

意方うら物ゆゑとてさるる

崇善

立

候媽の傍とてさるる 堀井



其契

主雙園

引明の元とてさるる 蘇が 存柁

松栢とてさるるのめ僕等

五空

考とてさるるのめ僕等

古山

長文寺



美奥

存招

月夜のやまのこ水たけのうら

崇言

立

年々々々々々々々々々々々々々々々



清和



嘿然

古原洞

えりや人の村むよ

月

枕舎

くちしぬよまをれ家

山陰

初春のく田芥の庭をみれば

古介



長史書

来鳥

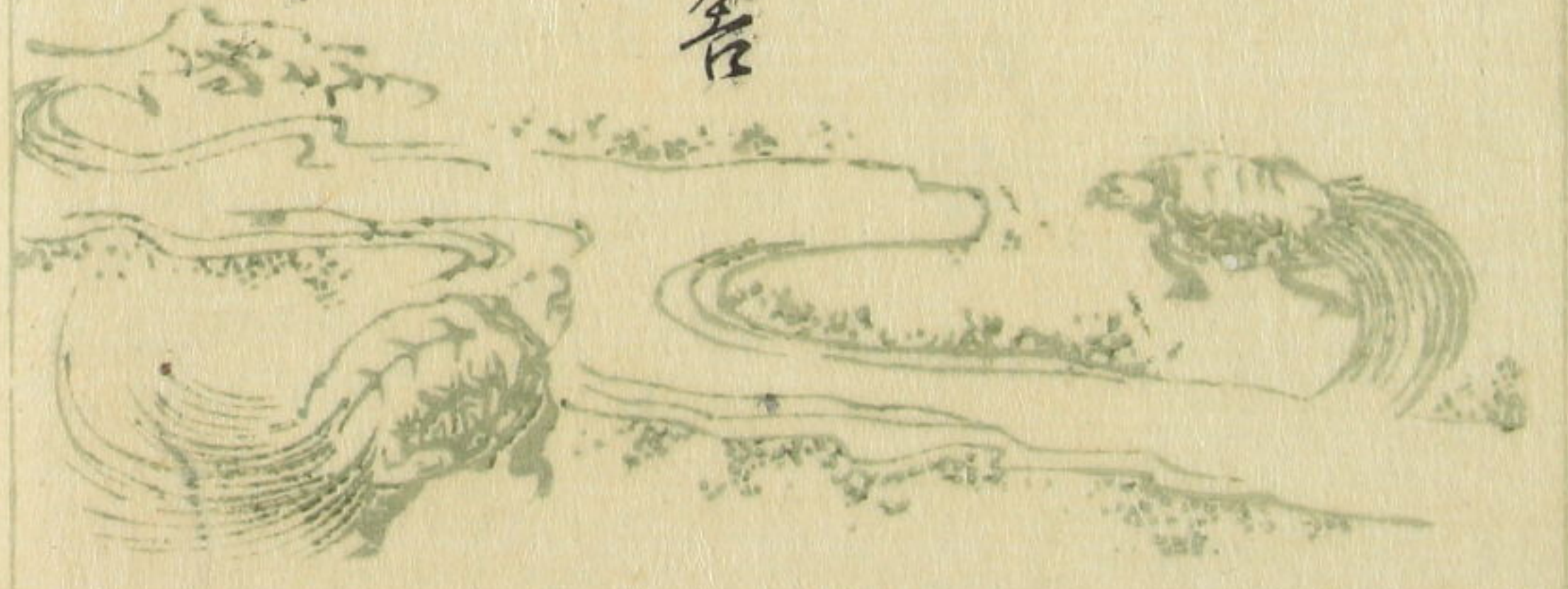
此書

水鳥の来後、くや、鳥、少

歳書

立

来り、斗、子、皇、を、海、一、年、の、書



蒼天

三出書

ま、つ、新、年、を、梅、く、ハ、青、の、書

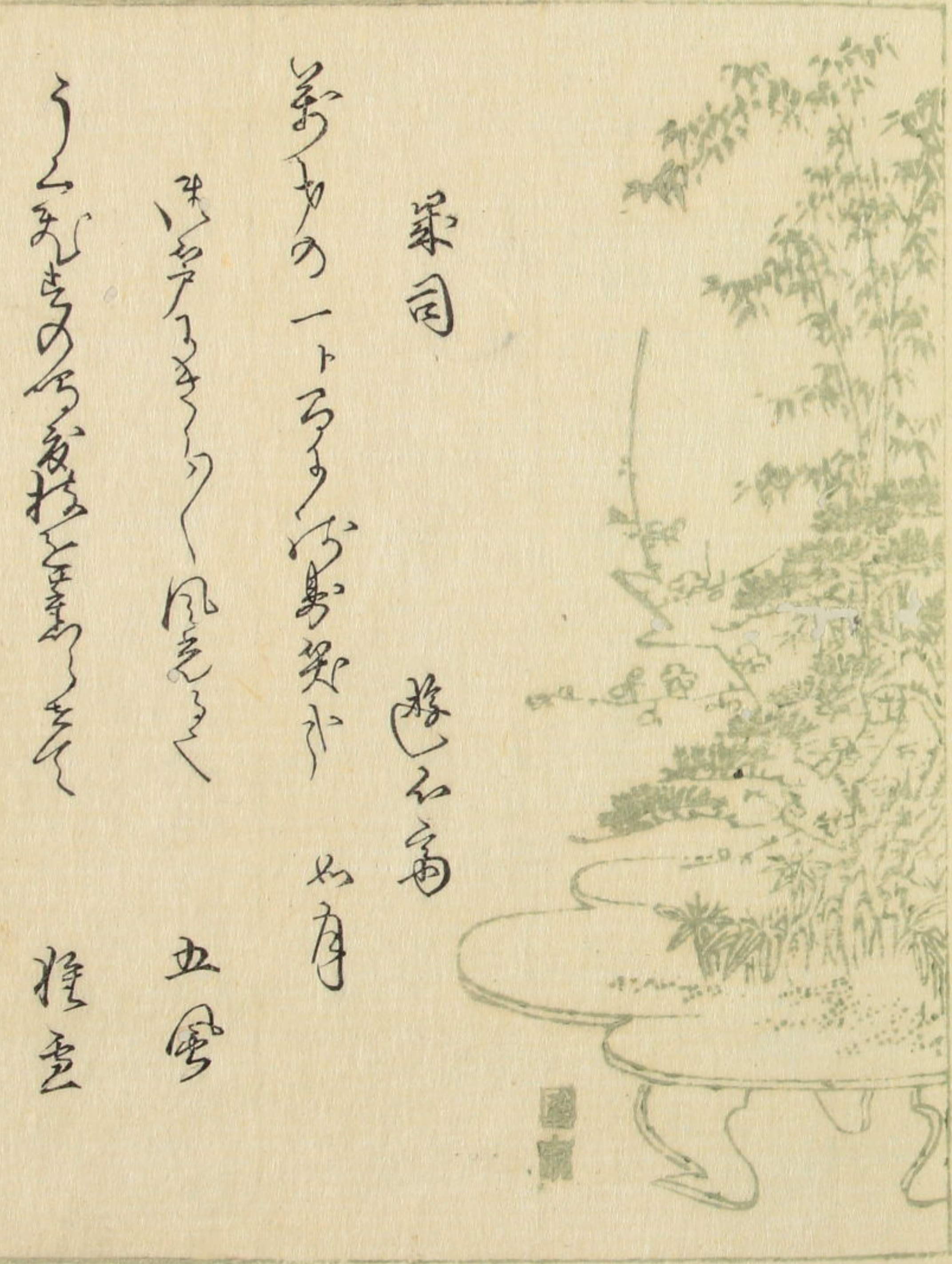
古書

分、つ、書、と、書、の、書、の、書

五書

以、美、の、神、の、心、を、物、と、す

柱書



兼司

遊石角

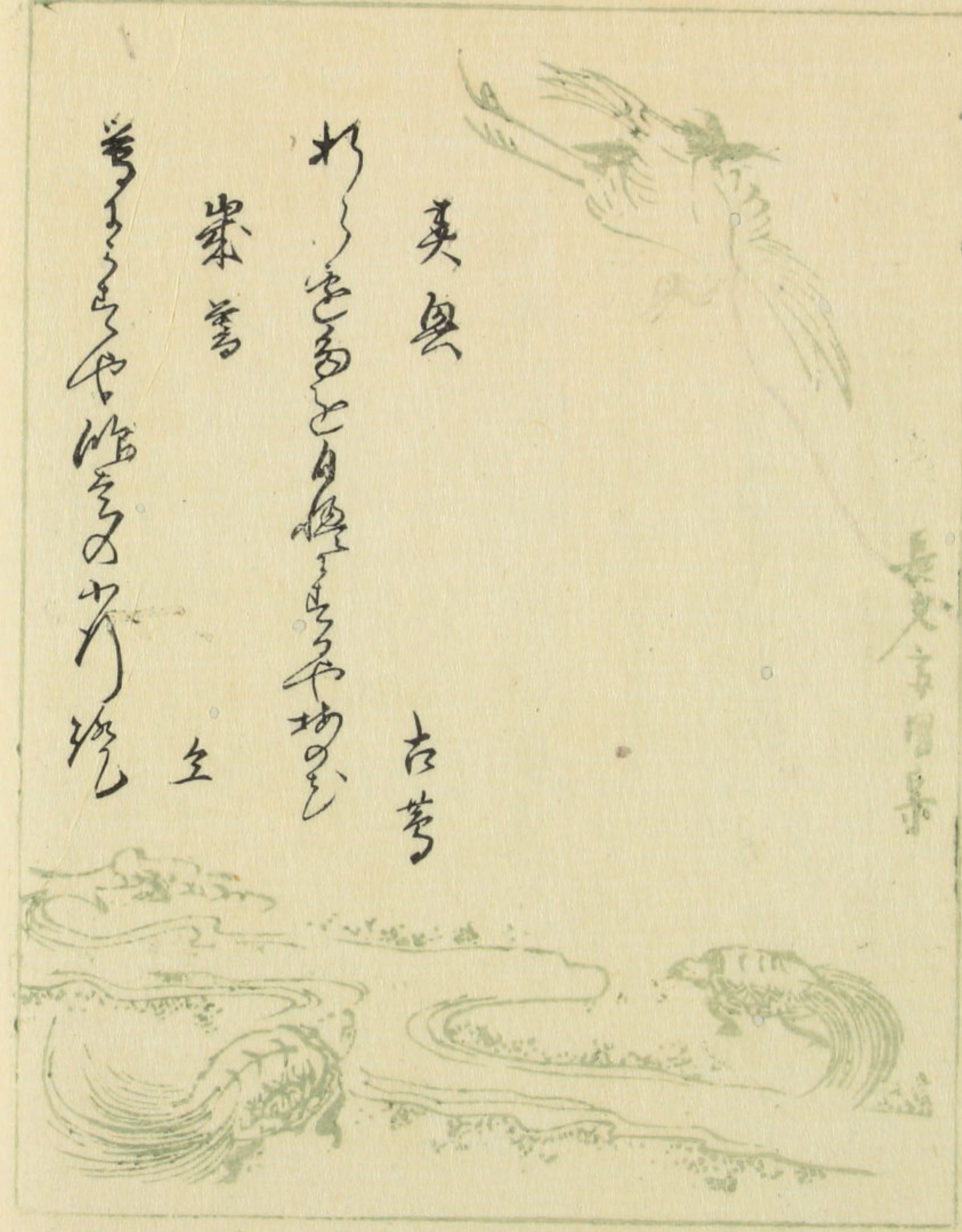
あやのしつらふあやか
如月

あやのしつらふあやか
風光

五風

あやのしつらふあやか
あやのしつらふあやか

推定



美典

古考

あやのしつらふあやか
あやのしつらふあやか

兼司

立

あやのしつらふあやか
あやのしつらふあやか

晴くあふまけのうらみ

古外

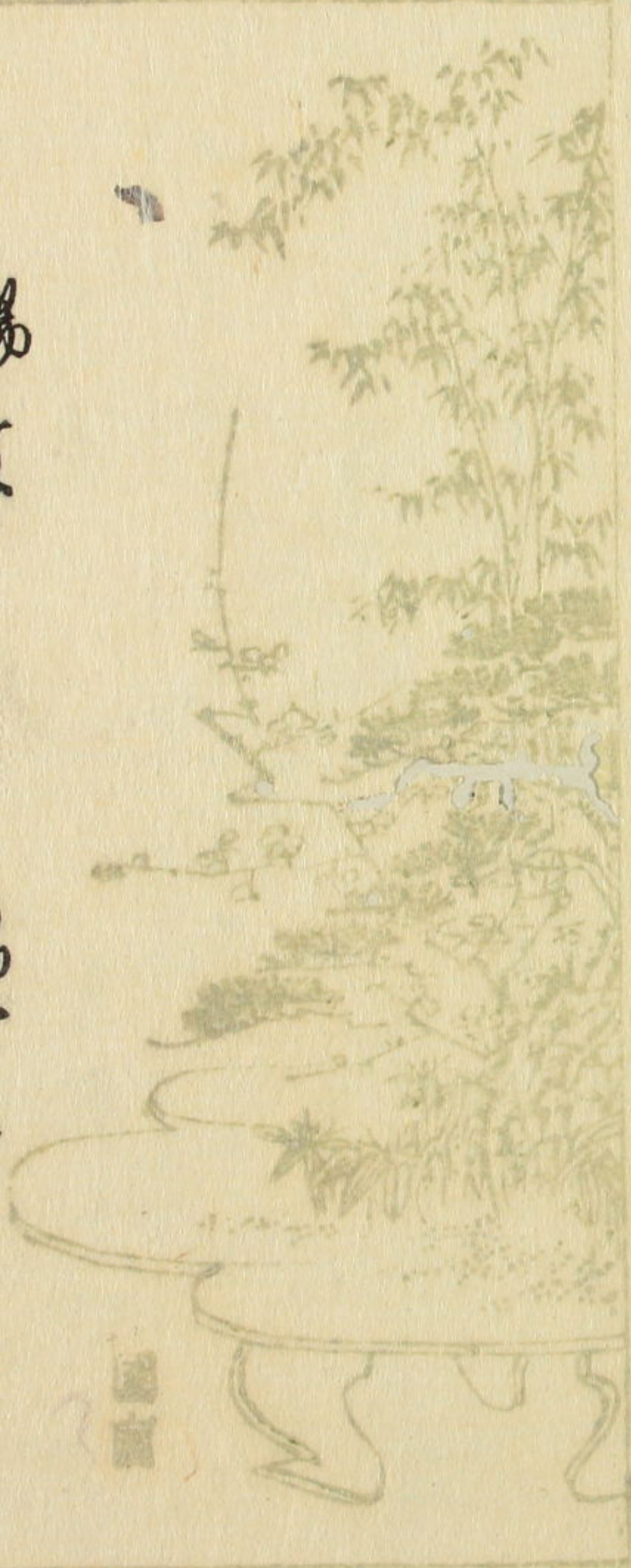
春のうらみ 慰の歌

五外

頂上の石浪のまじりて 遠流

陽々

陽七亭



陽七亭

真真

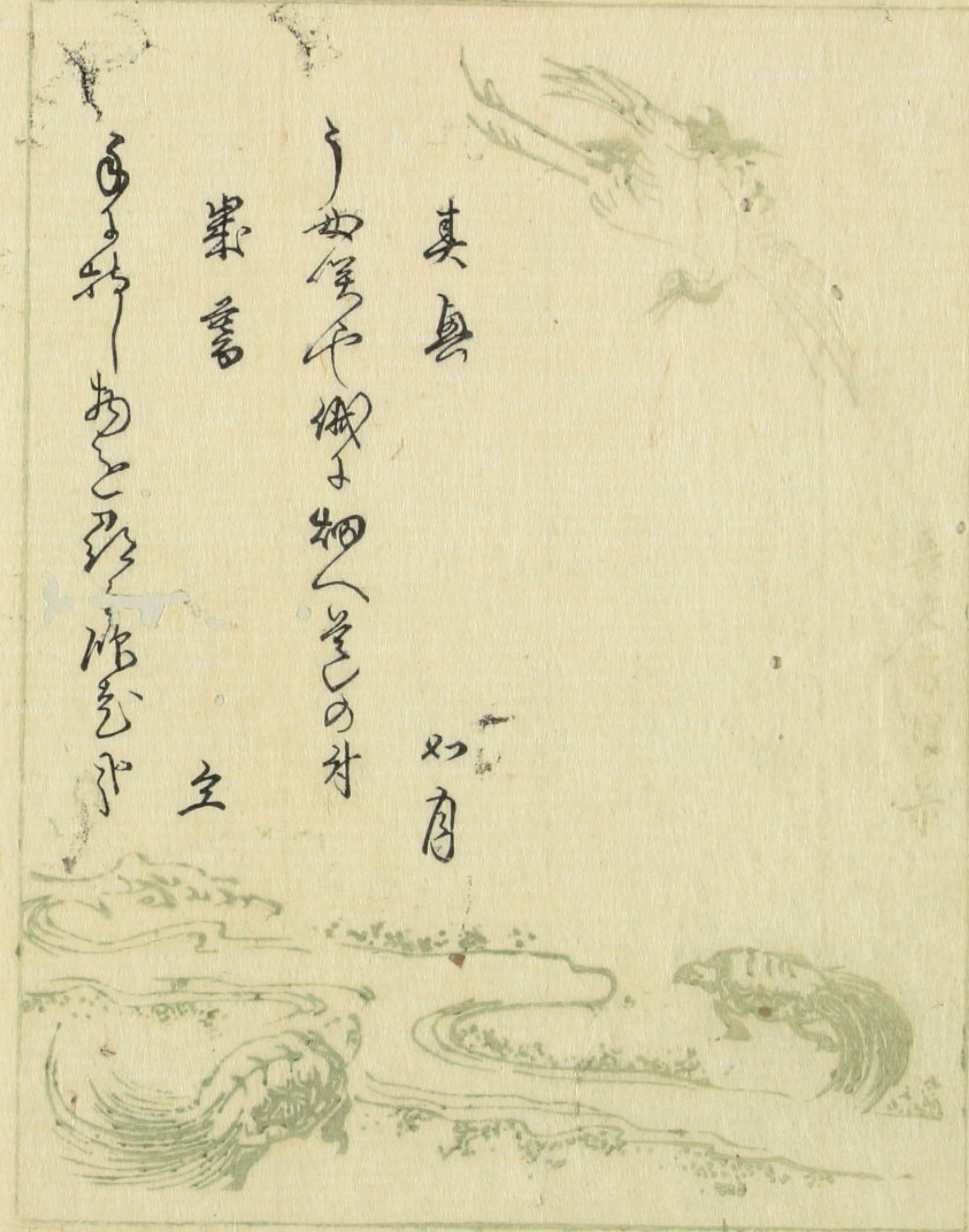
如月

くぬぎの城の如くさの村

紫雲

立

ふりかへし物とてはなれり



陽七亭

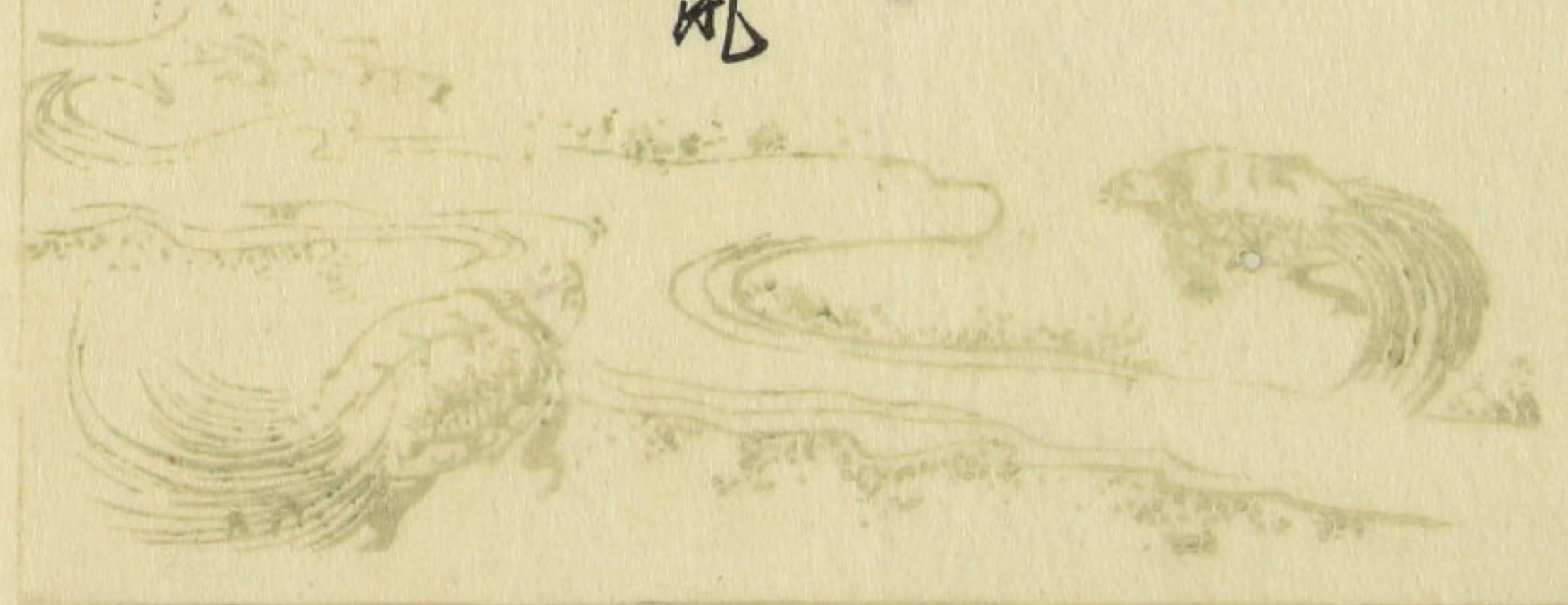


美魚

あゝ梅や月流るる園西

栄書

御心や切きし一糸をさす



長久寺
蔵書



初也

草子園

御傍の春絶の心切き

あゝ梅や月流るる園西

あゝ梅の静をさす

古本

藤樹也

長史字伯康



美典

宗也

一海之善(飛)...

藏善

立

本之候(水)...



園廣

通湯

松風鼓

之(意)也...

法考

人の和(善)...

立

梅(の)柳(の)...

意招

藤樹也



美具

法書

新くくくくくくくくくくく

楽書

立

大平やきききききききききき



長久寺目録
戸部



嘉年

善書

大平のきききききききききき

善書

晴く晴く晴く晴く晴く晴く晴く

五斤

くくくくくくくくくくくくくく

陸定

長久寺目録



長久寺御鳥

来鳥

遠陸

夜半の神鳥の神鳥の山田

宗言

立

鳥の神鳥の神鳥の山田



庭十二



こわ

新海堂

何事か知れ深きん福寿軒

かゝるはふふりくのみ

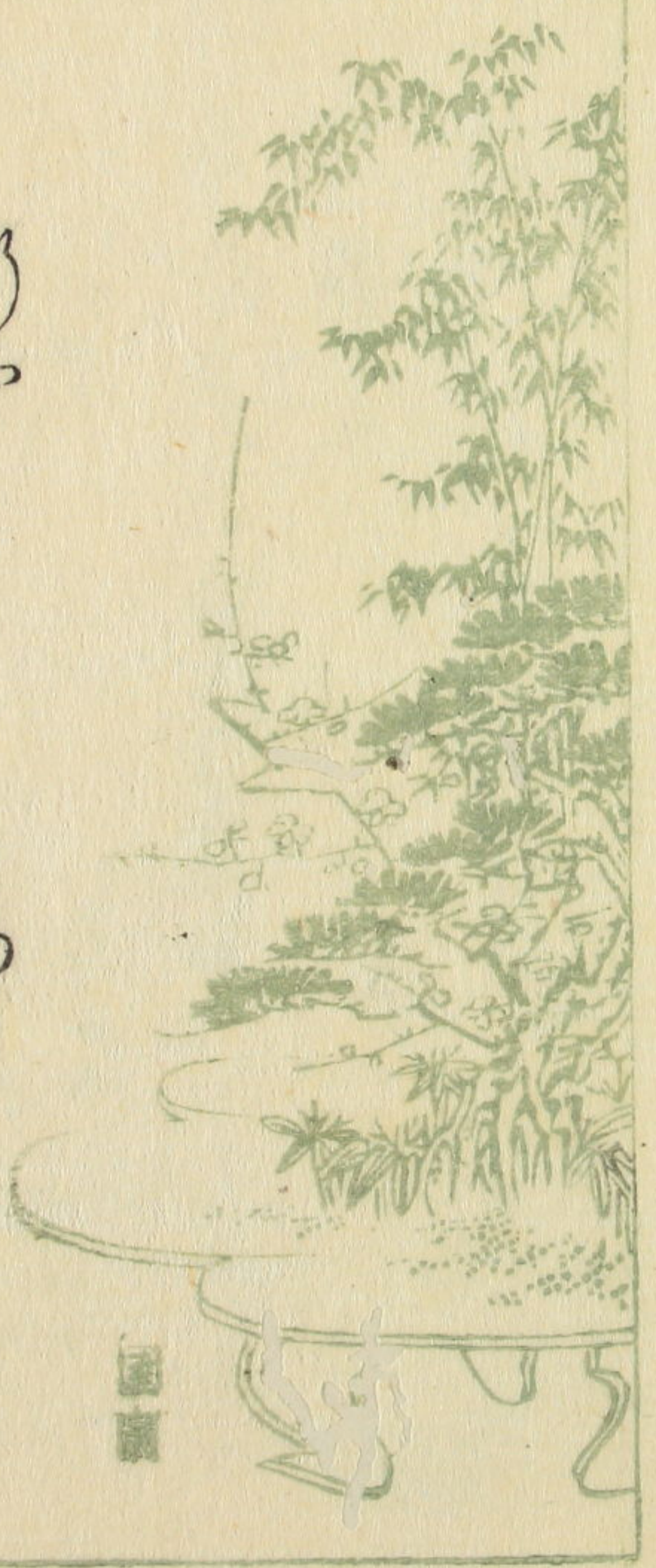
古松

新くはふ神鳥の美の庭

古松

新三軒

新
 始
 大
 古



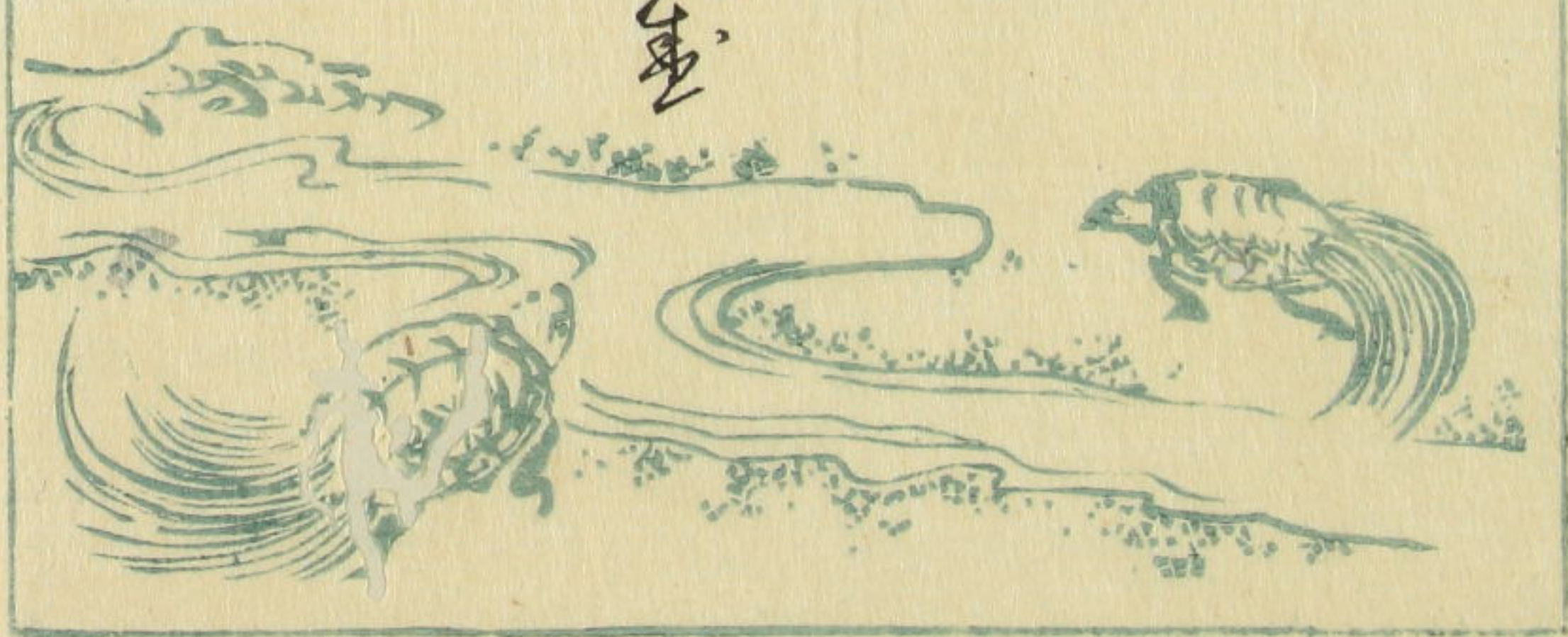
三十一



歳
 新
 也

長

暁



三十一



長文市留鳥

美具

鳥里

あまのこゝろの海鳥の思ふ袖

年暮

立

杖のこゝろの年暮の夜



万壽

余鳥屋

婦舞臺やまゝのりたてたてし 立山

わが心はまをりてく 立山

とくはるの翁のこゝろ 立山

立山



物々

養物色

可々有之可

美々々々

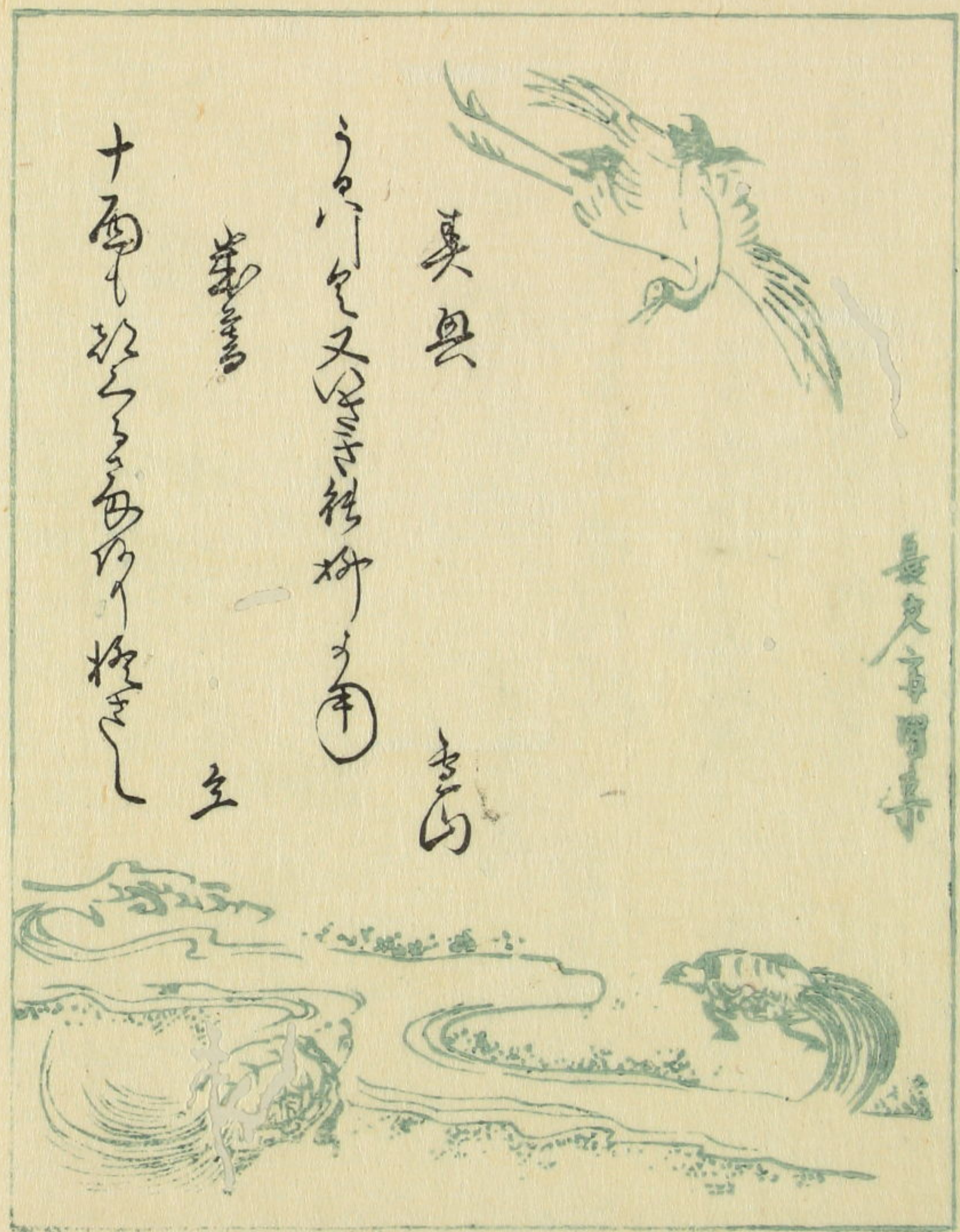
物々色

養物色

美々

國風

常三十四



長久寺習字

美々

美々

うんん又々々々々々

美々

立

十角中々々々々々

長史字圖景

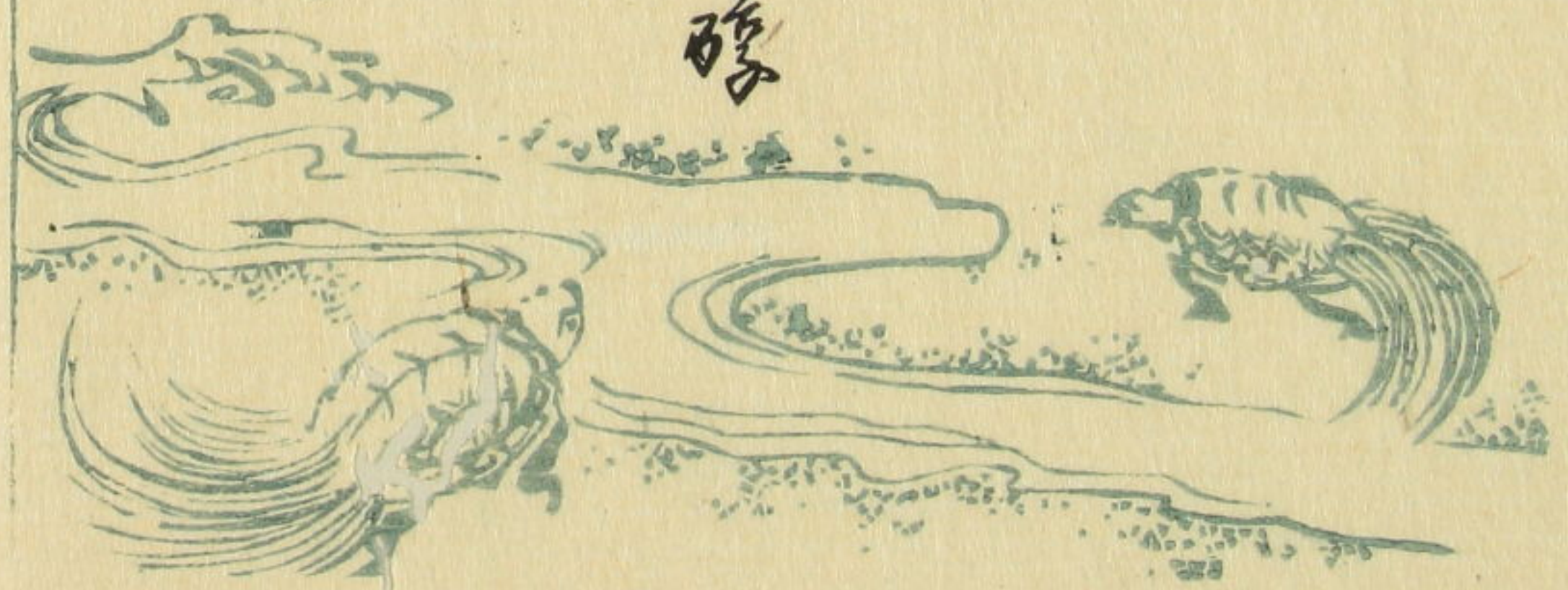


鳥

鳥

草

白



庭

庭

庭

庭

庭

第三十

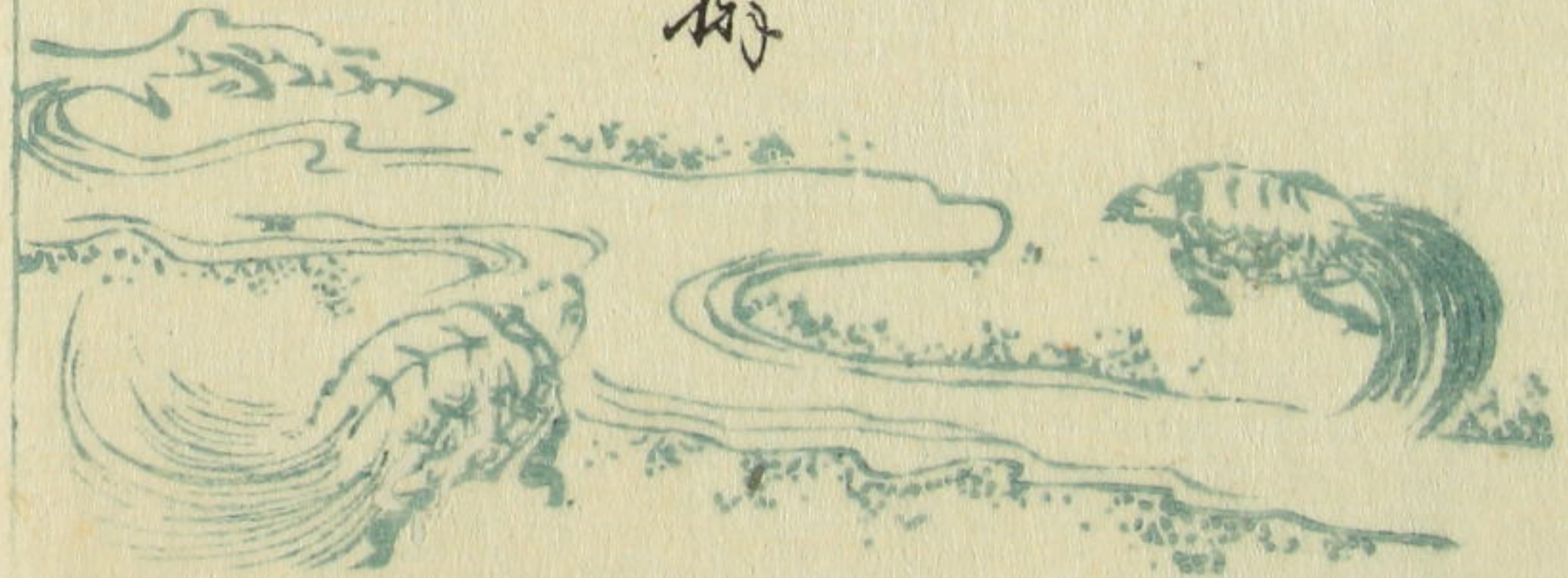


美鳥

一解

鳥の姿はもてふもてふ可なり

未だては接ぎていふ可なり



清堂

清橋堂

まの跡の心付もむをり

風花

鳥の姿も美の個性

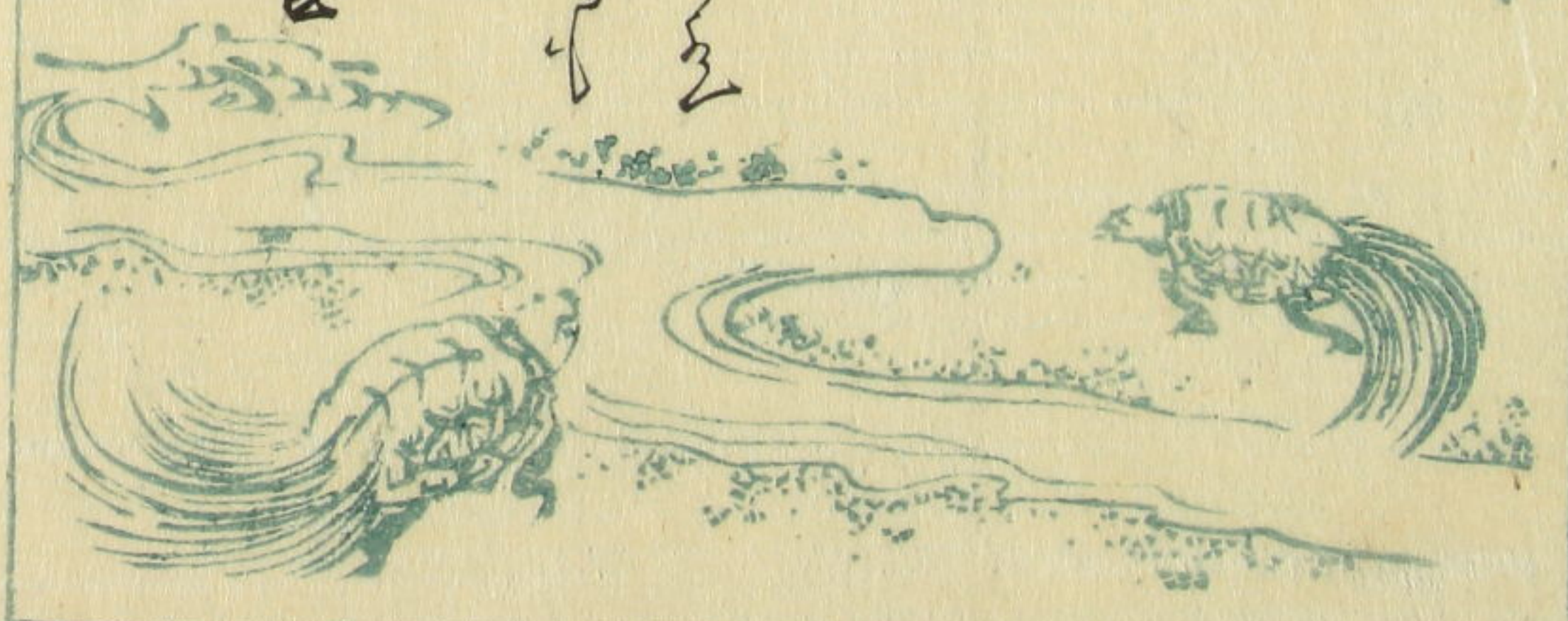
五原

橋活の姿も美の個性

古山



林の鳥の鳴き声は遠くまで響く
あつた勢はつてあつた家も
あつた名も林もあつたあつた
又あつた名もあつたあつた
あつたあつたあつたあつた



法橋を伝う童子古き
ゆきと霞のま

大輝よ咲く花をくく輝く花
ゆきとくく人よあつたあつた梅も
あつたあつたあつたあつたゆきも
人よあつたあつたあつたあつた梅も
あつたあつたあつたあつたあつた梅も
あつたあつたあつたあつたあつた梅も

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

つらき星の光をよみて

東昇 古 旌

遠くを渡る舟の月をよみて

舟の影を照らす燈火をよみて

信地 鷹 五 菊

右の舟をよみて

舟の影を照らす燈火をよみて

信地 鷹 五 菊

舟の影を照らす燈火をよみて

舟の影を照らす燈火をよみて

万葉や舟をよみて

信地 鷹 五 菊

舟の影を照らす燈火をよみて

信地 鷹 五 菊

舟の影を照らす燈火をよみて

舟の影を照らす燈火をよみて

信地 鷹 五 菊

舟の影を照らす燈火をよみて

舟の影を照らす燈火をよみて

舟の影を照らす燈火をよみて

二二

久々巾着をききうらぶ紅毛袴

法善舎
西狐仙

懐胎巾着新く川もり社高

人呼ぶて遠くは遠く所をい

法善
五折

おねをきき笑つて千代の意い

おしほくは後出は後出の用

五重襦
七目

おしほくは後出は後出の用

おしほくは後出は後出の用

書物の墨の匂い巾着想ふ

法善舎
お中

梅あや巾着はあやもはあや

つらつら巾着をききあやもはあや

法善舎
お中

えんや巾着をききあやもはあや

あやもはあや巾着をききあやもはあや

法善舎
お中

あやもはあや巾着をききあやもはあや

あやもはあや巾着をききあやもはあや

法善舎
お中



鳥居の形

石

鳥居

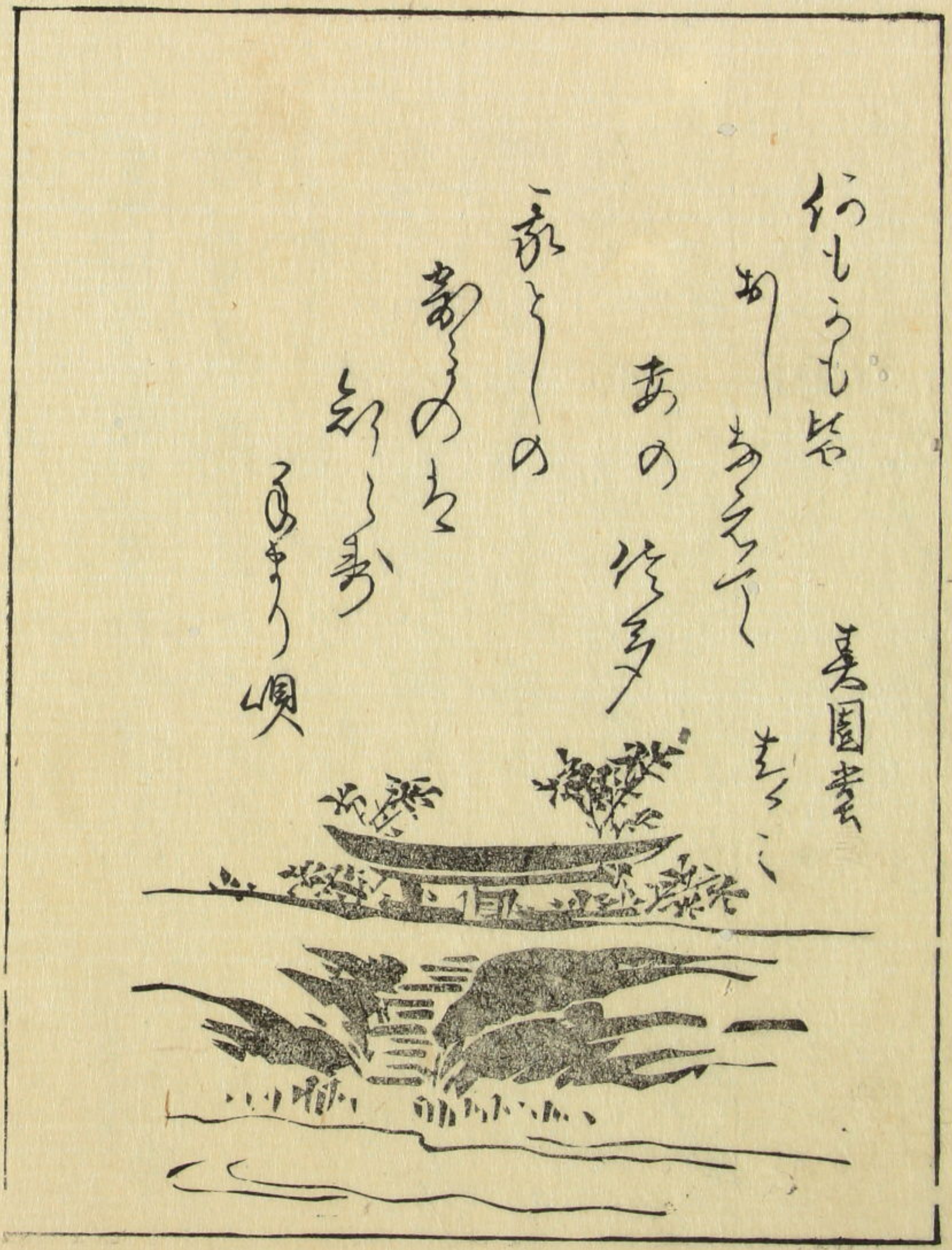
鳥居

石

鳥居

鳥居

鳥居



鳥居

鳥居

鳥居

鳥居

鳥居

鳥居

鳥居

鳥居

鳥居

鳥居



二



山
の
影

日
の
影

松
の
影

松
の
影

松
の
影

松
の
影

松
の
影

松
の
影

松
の
影



六六

華
目
と

分
り

中
の
人

春
の
海

初
物

起
り

曲
り

折
り

活
き

家
の
影

松
の
影



三五

かしら
 かしら
 かしら
 かしら
 かしら
 かしら



大聖舎
 破角

園雨也

かしら
 かしら
 かしら
 かしら
 かしら
 かしら
 かしら
 かしら







初鴈や菟の

中とハ思ひなす

己結色路

晴の

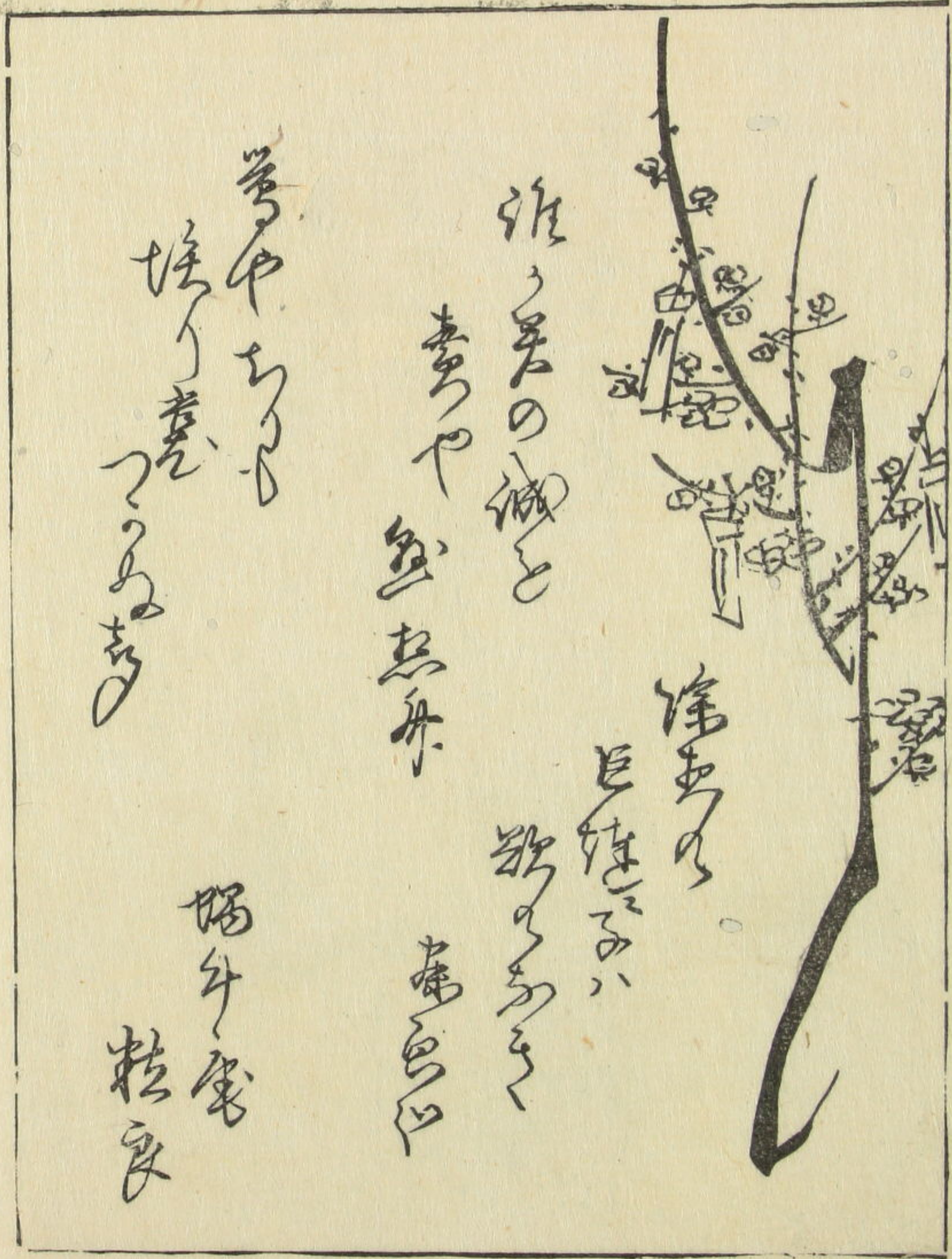
かゆさ、あつ

落つけ、鏡の

世の中、ゆき

流す身

五輪



等中ちりり

埃の巻

つらき

誰の涙を

あつや

魚舟

毒色

流す身

巨匠の子

歌のあそび

鳩斗雀

粒食



信乃とて書

ちのあふ

地の子

中夜
あふの空

あふの空

あふの空

山下
里橋

子雉也

柳
うか

あふの空
あふの空

あふの空

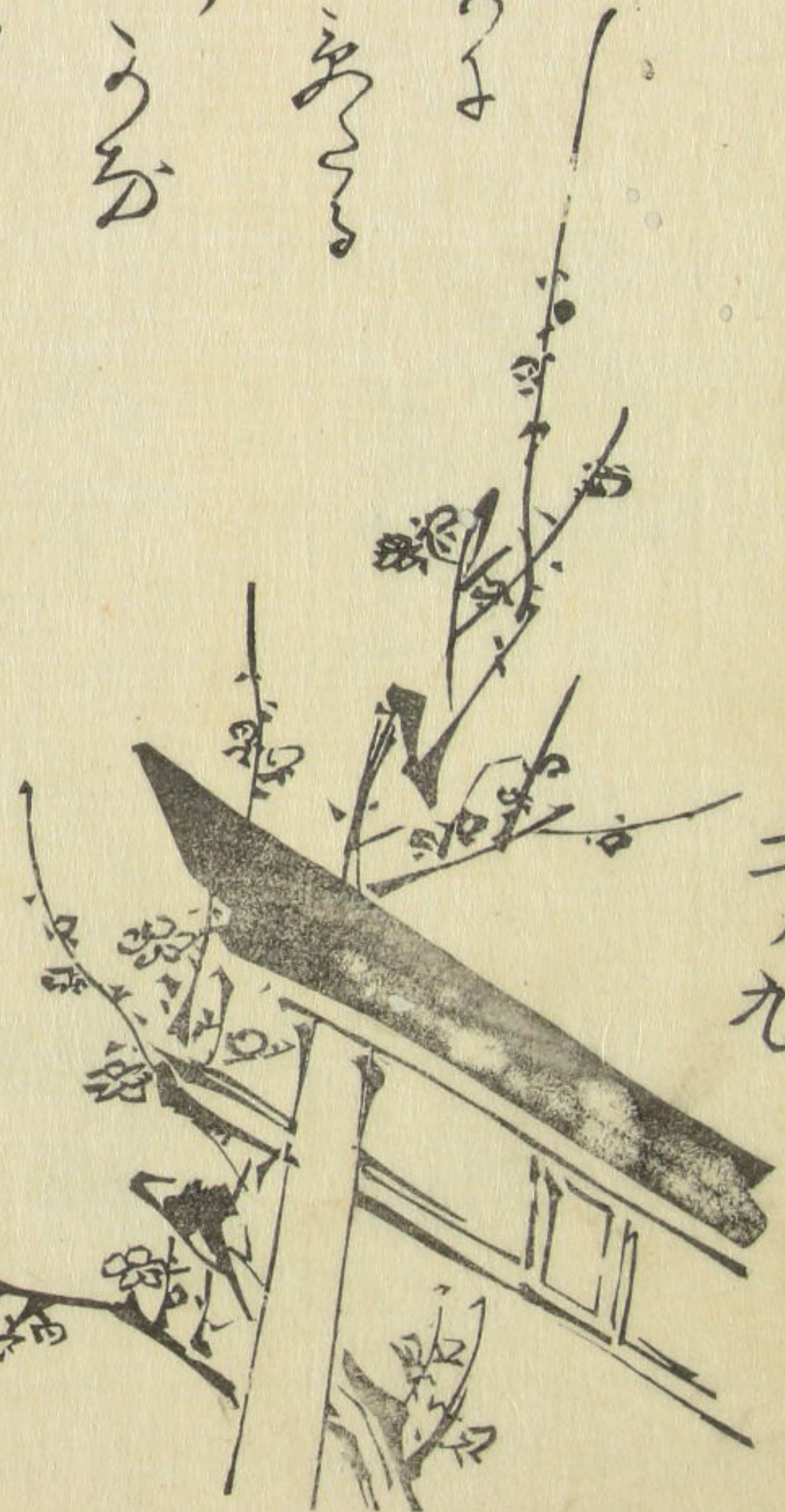
あふの空

あふの空

あふの空

あふの空

あふの空



二九

法正の
 考へ
 切り
 帯可平
 うき
 焦石

候
 湯
 白
 梅
 鳥
 成
 綺



講
 行
 又
 儀
 何
 里
 如
 儀

雨
 の
 降
 中
 志
 玉
 野
 鳥
 末
 分
 志
 丹





津の川
 喜多川
 柳の影

若水の中
 舟の影

舟の影
 舟の影

舟の影
 舟の影
 舟の影



奇仙之吟

昔中野の山に雲をくまひて

有臣

薄き雲のまにまに消るは空色

有雄

礼場は昔も是れ名をたつて

顧山

舟の舟場の縁をよみて

臣

薄き雲のまにまに消るは空色の舟

旌

昔もくはくは相の一葉

山

林をぬく雲の舟の人通る

臣

紫しるしの足燈を舞ふ

旌

見別るる故の音もと思ふ

山

法華の舟の雲も業も

臣

秋意を軽くも秋の舟

旌

糸の舟の舟の舟の舟

山

清光を子梅も咲けり十分は
芽子も角力の名を流る 月
啼きまよふ魚つと鮎と何れも
光のあはれをえそたつくり
曉のむす梅生の人を誰
うねるまの津の山雲をこころ
梅を梅の中ふふふふふ梅を産
寺へ梅を 堀出しく哉 雲

旌 色 山 旌 色 山 旌 色

暮歌けり梅も咲けり十分は
時をわたり梅も咲けり十分は
梅も咲けり梅も咲けり十分は
梅も咲けり梅も咲けり十分は
梅も咲けり梅も咲けり十分は
梅も咲けり梅も咲けり十分は
梅も咲けり梅も咲けり十分は
梅も咲けり梅も咲けり十分は
梅も咲けり梅も咲けり十分は
梅も咲けり梅も咲けり十分は

旌 色 山 旌 色 山 旌 色



えいせいあね
きよしほあやめ

井田の作
あやめ

きよしほあやめ
あやめ
あやめ
あやめ
あやめ



きよしほあやめ

あやめ
あやめ
あやめ
あやめ
あやめ

きよしほあやめ
あやめ
あやめ
あやめ
あやめ



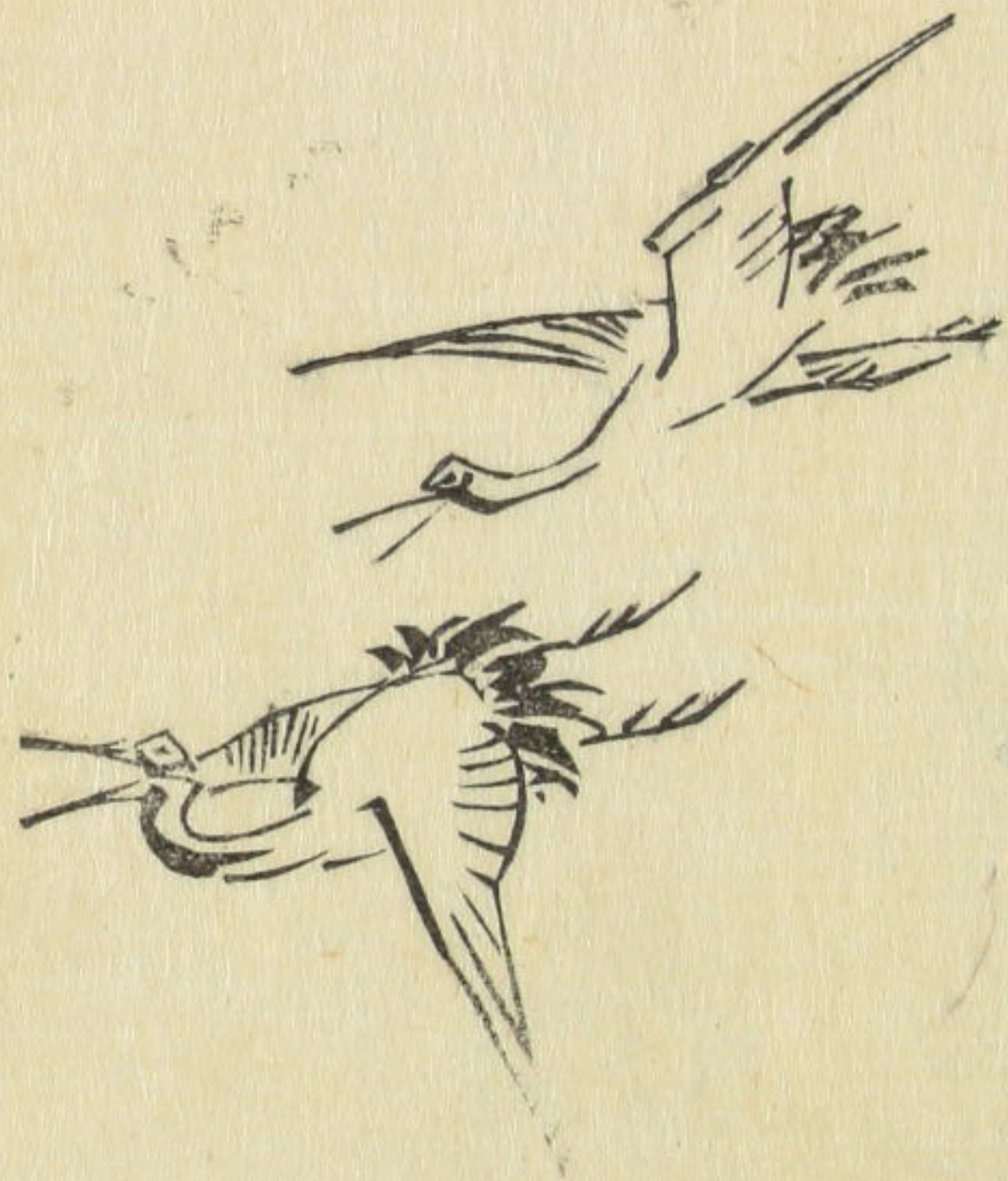
井田の作
あやめ



海
 初
 多
 多
 仕
 年
 小
 田
 明
 林
 可
 園



多
 少
 多
 の
 少
 少
 少
 少



裡 辨 号

あしおのこ せうきん 中梅のむ

古山

井 実 なる 山 人 今 春 風

五竹

新 小 橋 の 鳥 留 り なる 今 春

君山

手 稱 下 行 人 の 志 井

古号

只 も よ 月 小 舟 と し 一 甲 子

風彦

一 人 あり なる 山 人 今 春

五竹

木 橋 なる 鳥 留 り なる 今 春

東府

海 美 橋 の 志 定 ら なる 目

柳雨

燈 籠 の 志 定 ら なる 今 春

世存

六 竹

ありし桶い斗りこむま 大川
 夕月のよりきくあまの月 松若
 江戸のよりの湯のよりの月 園甘
 着地あつてきく現代の月 彦境
 古話のやうくハ女の事 一鳥
 即ちてあつてあつてあつて 一鳥
 青き雲うらやまのあつて 一鳥
 晴くくく雨の弾之山とて 一鳥
 赤くハくくくくくく 一鳥



漆
 解
 巾

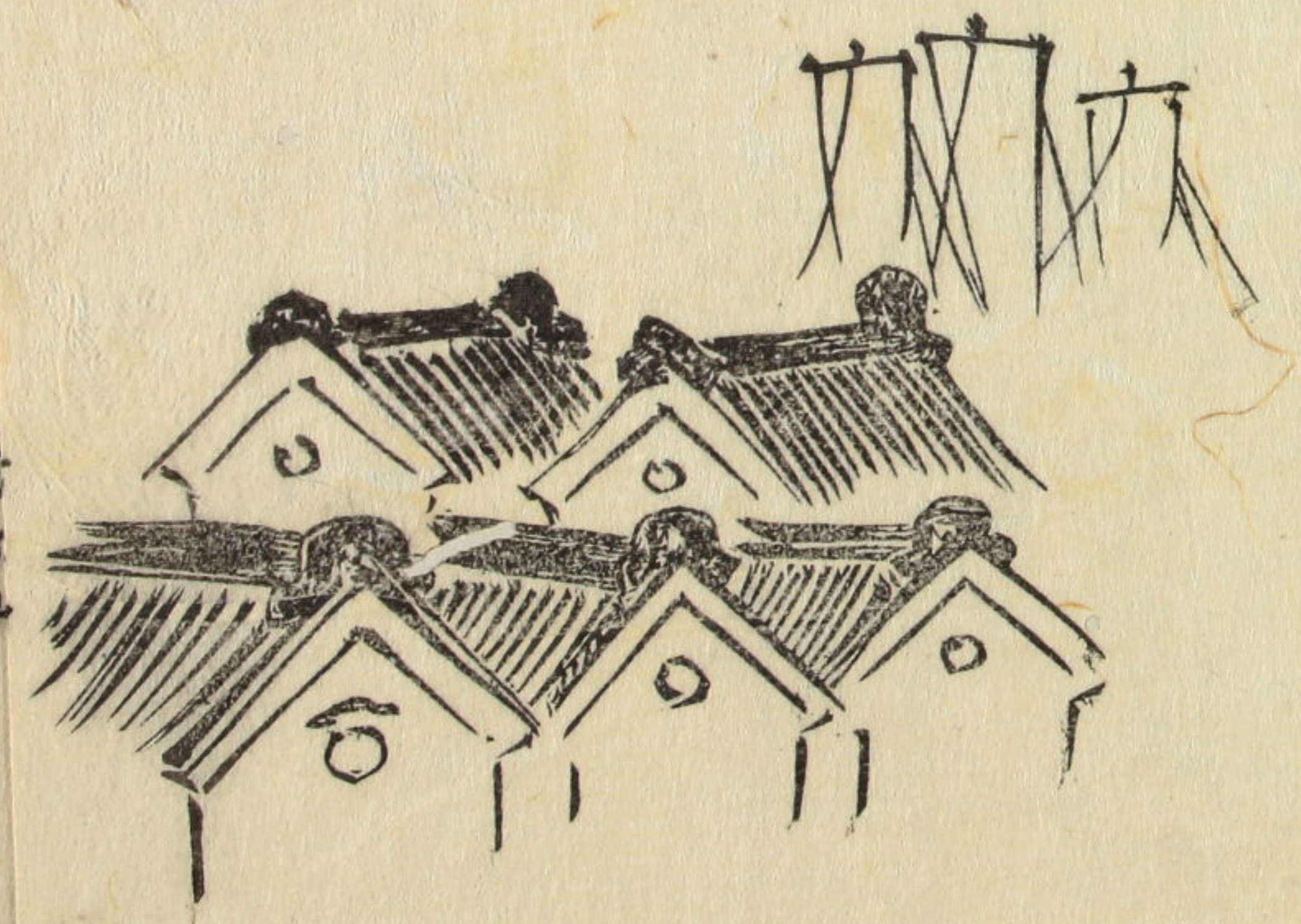
花
 持
 け

け
 け
 け

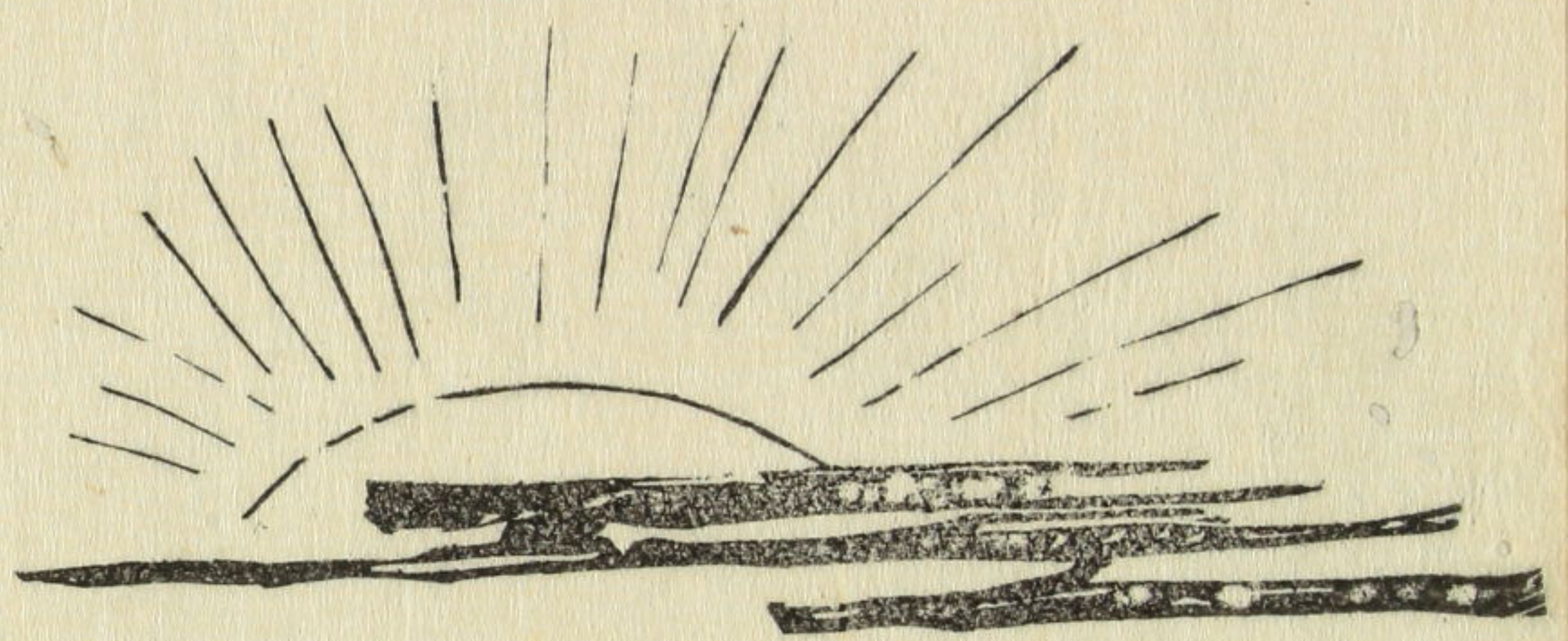
赤
 け
 け
 け

名
 持
 け
 け

しのびのこころ
 黄舎のこころ
 仕合のこころ
 しのびのこころ
 黄舎のこころ
 仕合のこころ
 しのびのこころ
 黄舎のこころ
 仕合のこころ



二廿五



大空の
 しのびのこころ
 黄舎のこころ
 仕合のこころ
 しのびのこころ
 黄舎のこころ
 仕合のこころ
 しのびのこころ
 黄舎のこころ
 仕合のこころ

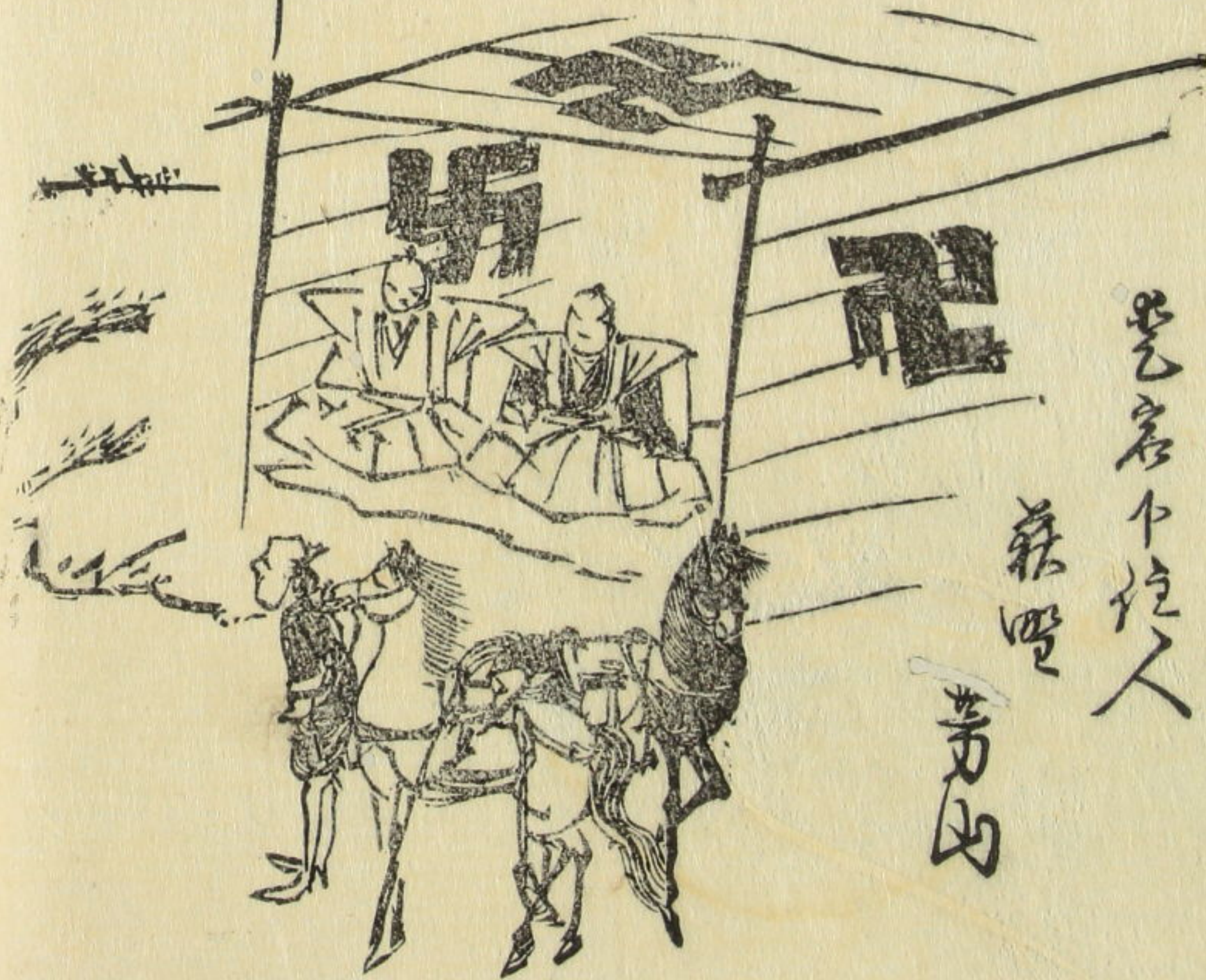
二廿三

三物 百兩 萬
の 品 万



二ノ廿五

高の物 約 西 尾



是名中位人

薪燈

芳山

二ノ廿三

高辛ノ時ノ犬也
 フノナキ犬戎ヨリ
 責テリ兵將ノ首ヲ
 得之者ヲ姫トモヒト
 アリケルニ大吳將軍
 ノ首ヲクワユ東ル
 帝女ヲアタフ犬女
 ツテ南山ニ入り
 六入ノ子ヲウマフノ
 子孫ハコルト有リ
 是ハ犬傳ノ極意ノ種
 ナルベシ

盤瓠



高辛ノ時ノ犬也
 國宗也

但ニ成ハ大ナニル

萬歳巾

三事

海

まき

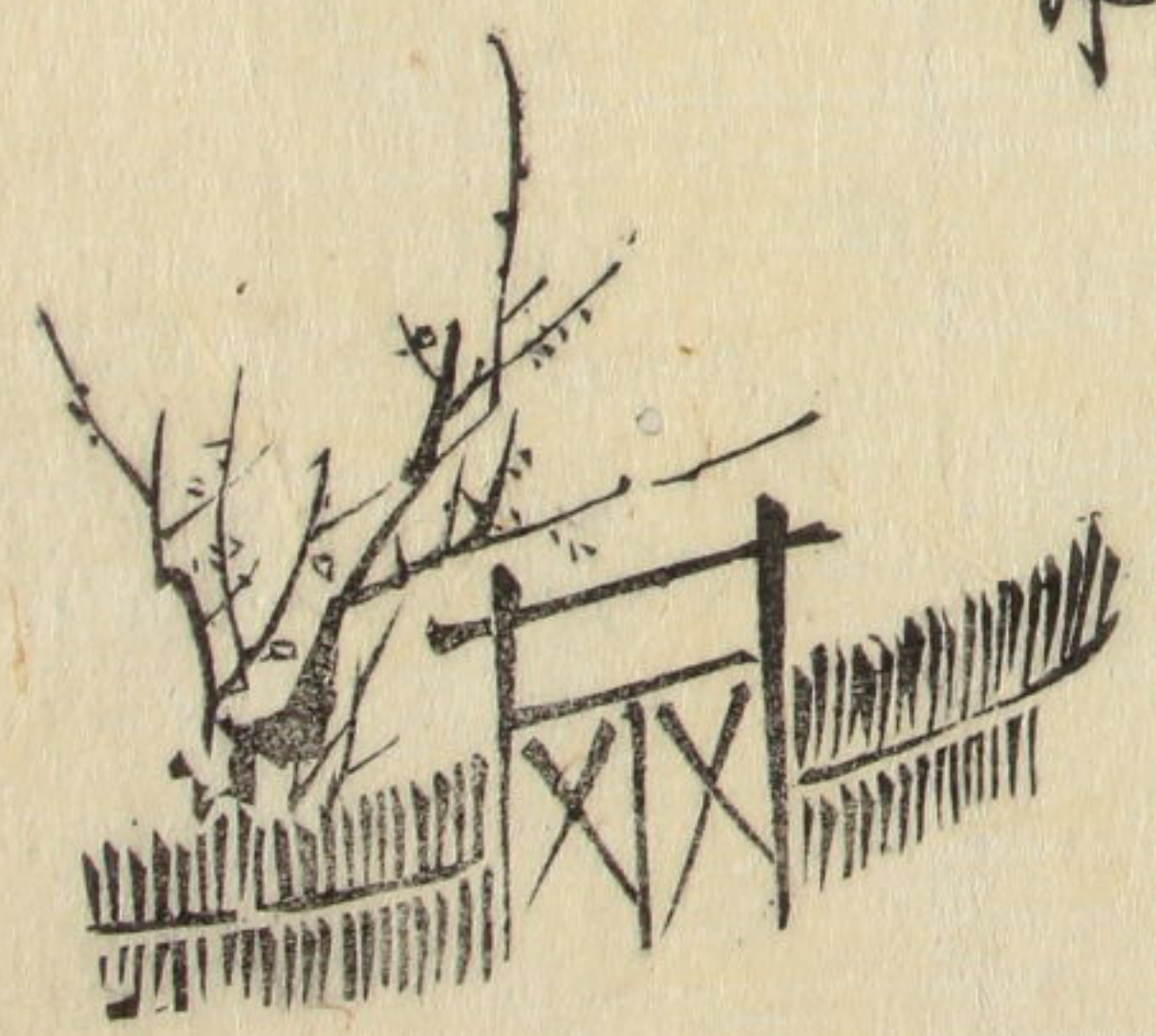
考

考

考



今立一落海
 流引水好う年
 新しき
 古井
 去る
 去る
 去る
 去る
 去る



高
 山
 崎
 崎
 崎
 崎



新の至
 去る
 去る
 去る
 去る
 去る

ころをなま
 吹れて
 ゆるま
 ろろろ
 注水
 ねろま



節の舞
 美
 波

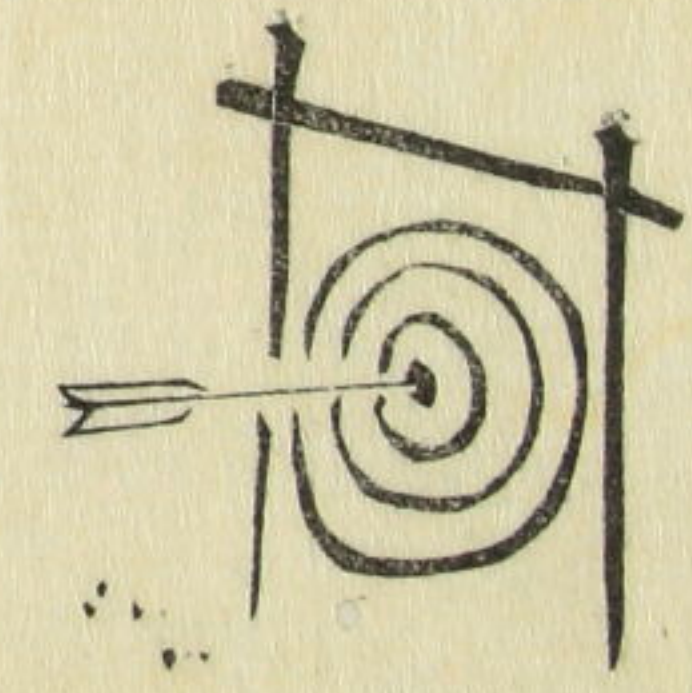
あせき

何
 ん

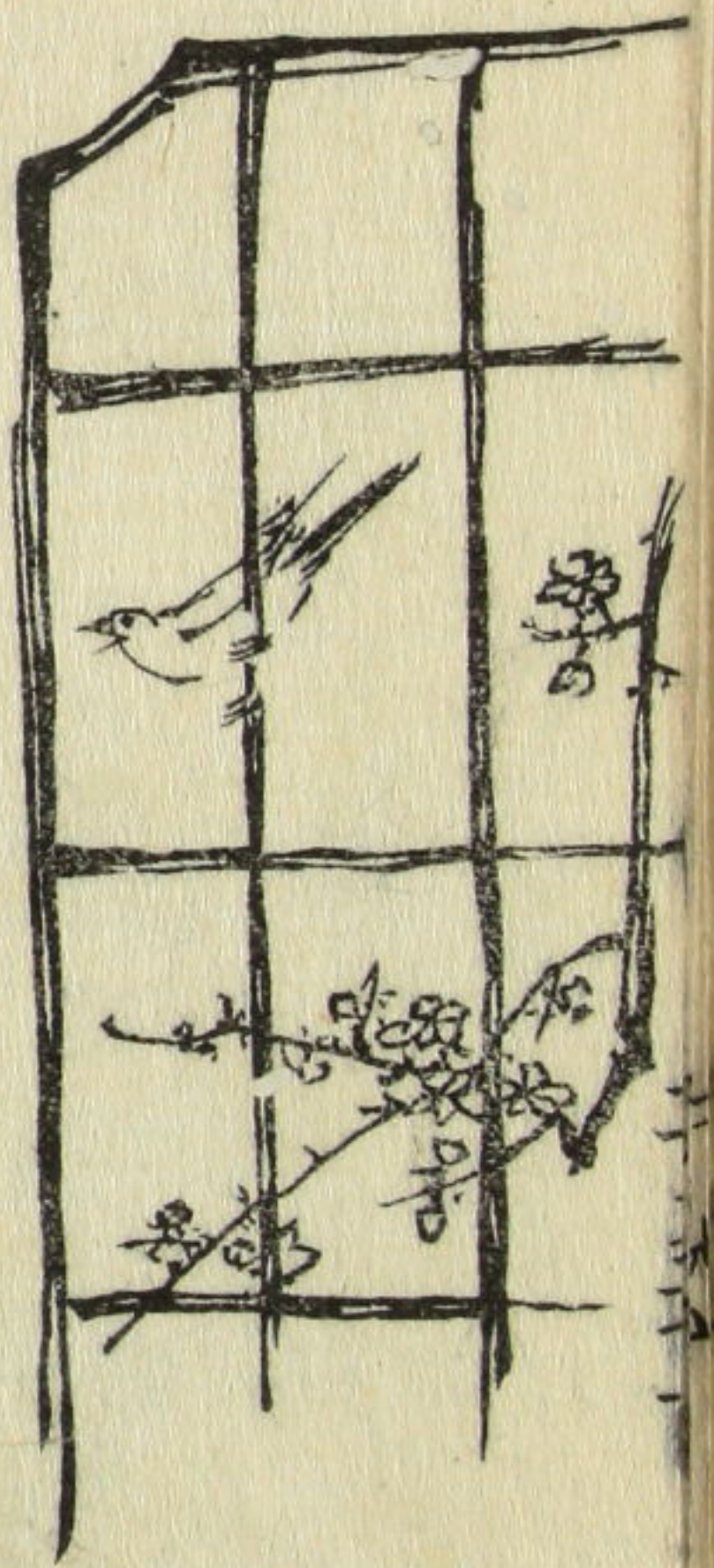
吹
 奏

枝

不
 々



二
 十



藤中とて一筆

百韻表

蓬(素)のつとを伴擲のたつ便

芳のつとを伴擲のたつ便

帆のつとを伴擲のたつ便

古木のつとを伴擲のたつ便

告地子のつとを伴擲のたつ便

たりのつとを伴擲のたつ便

く陣のつとを伴擲のたつ便

庭のつとを伴擲のたつ便

翁

五山

五山

古松

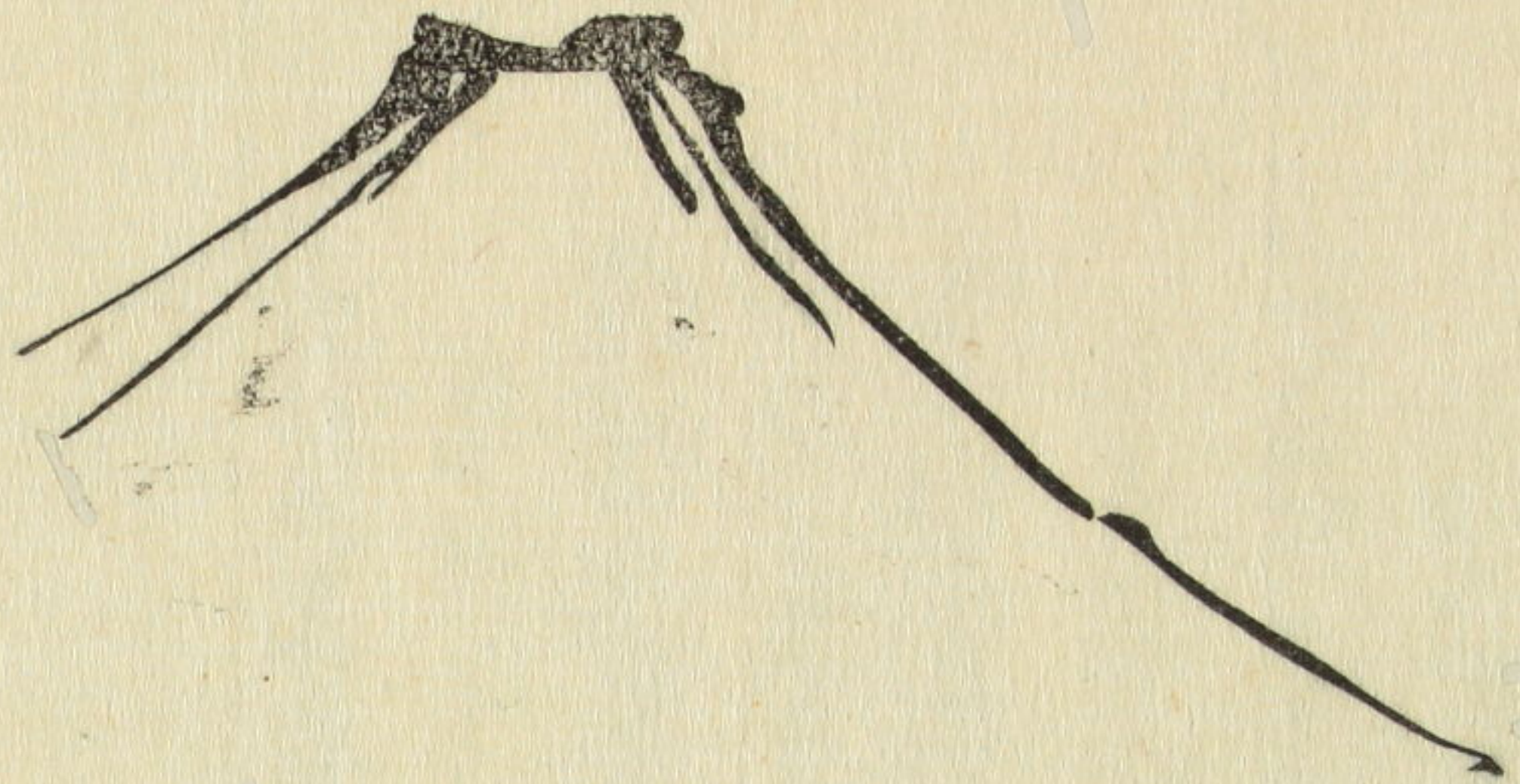
古松

古松

古松

古松

六六



神皇正統記

御代

皇極

仙臺

掛社

皇極

御代

皇極

水鏡

皇極

皇極



水鏡

皇極

皇極

皇極

皇極

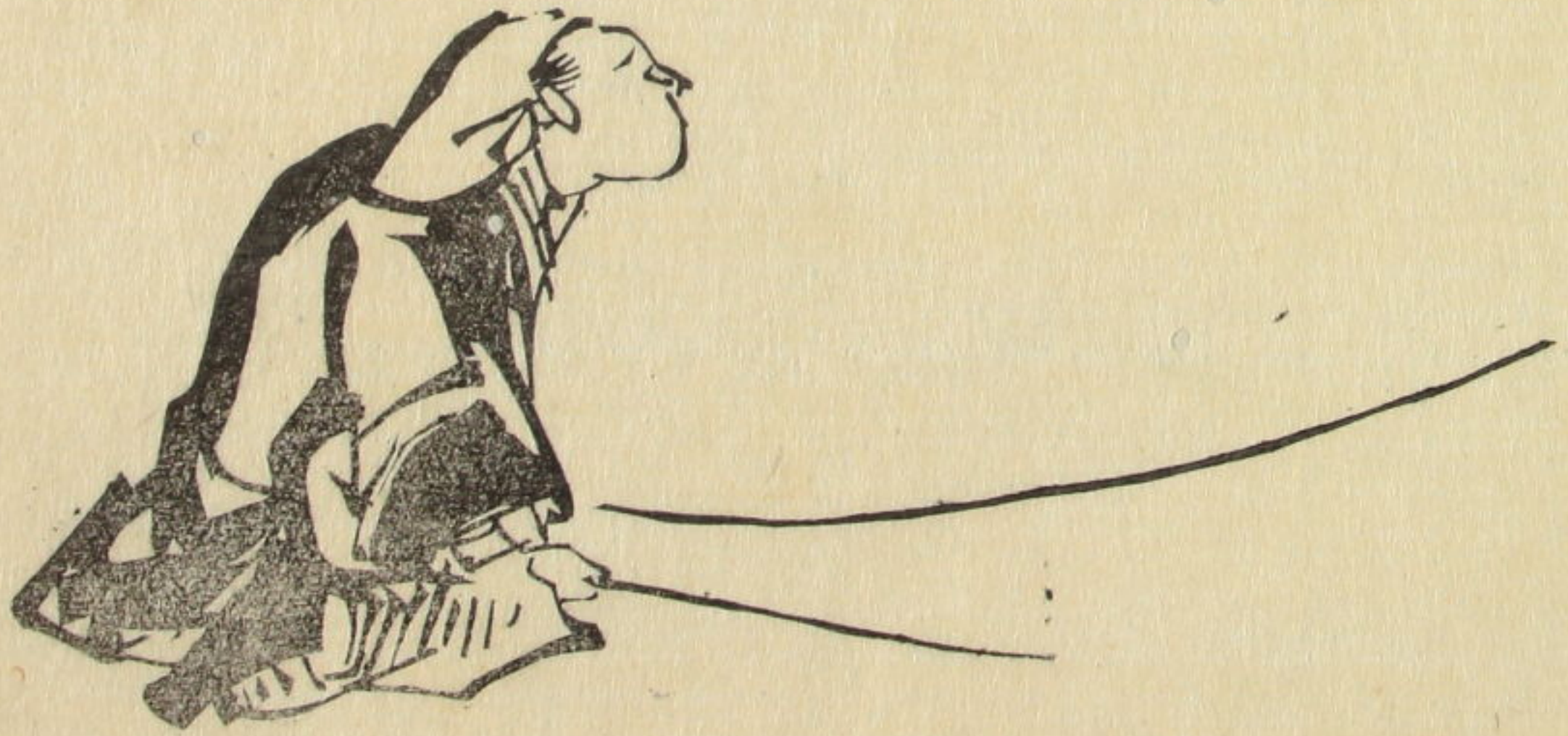


皇極

皇極

皇極

山の子
 山行
 和く柳哉
 市物
 田子
 葉のひ
 師
 舟
 舟り
 宝
 宝
 母
 舎



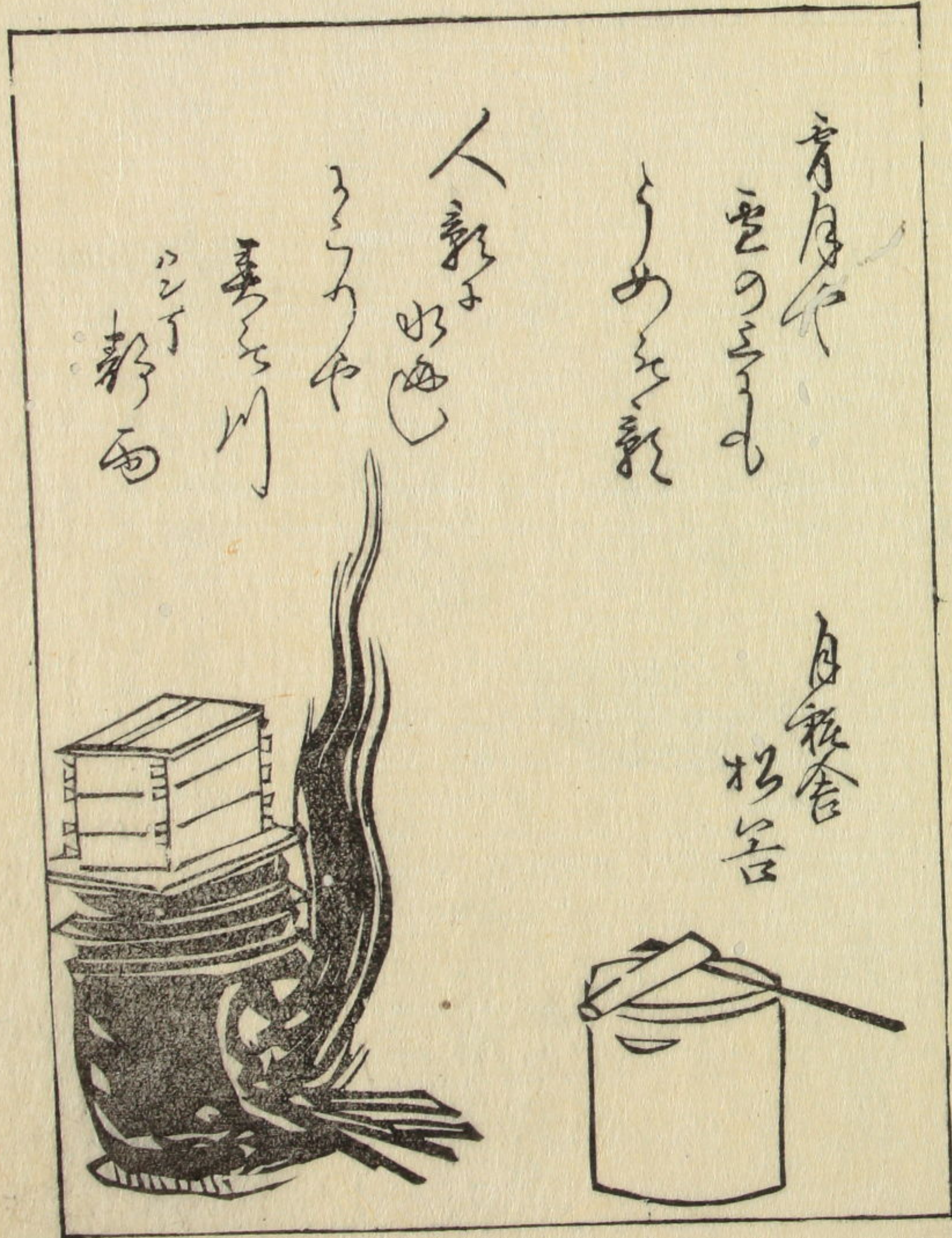
二二五

十
 玉
 き
 月
 衆
 舎



宗
 物
 舎
 又

二二六



身月代
 聖のまじり
 うめを乾
 人乾子
 水色
 うしろ巾
 美川
 新雨

白紙舎
 松谷



高き坊
 物の
 けしん
 坊主菜
 玉の形はうら
 五の
 うらま我
 直き
 みる花

新雨

高き坊

船白やむらさきもむらさき 色も暮る 岸も
遊女も小唄も縁中もつ唇は肩を
色も白くも人並に 舟中も國 執事
小唄も八丈も中納言 陸之南 色も
落月の海も白くも押し舟も 七五
お利口も御威も是も未だ 撥也、 兎十
お色もやむらさきも海もむらさき 菊十

隙橋も暮るも 浮世の柳子下り 糸も

落月も 浮世も 縁中も 舟中も 色も
お色もやむらさきも海もむらさき 菊十

為帽子も着て 遊女も 舟中も 色も
お色もやむらさきも海もむらさき 菊十
舟中も 色も 舟中も 色も 舟中も
舟中も 色も 舟中も 色も 舟中も
舟中も 色も 舟中も 色も 舟中も
舟中も 色も 舟中も 色も 舟中も

うつもやまをいそよの新しき、五管
研つゝ水と流しや紙にくす 牙 五山
喜の如し雨と飲ふ地境うれ 在島 五山

毒言や昔外よりあるはく 以終て 風海
う「切の世をさるやゆ接、 在在
病のとも重の白や 如く境、 在會
を心め海も喜の若く代、 風慈
離絶をさくはと音か 娘の航、 巧るま

心懸くういひや 落月夜、 芝友
大傳の條々毎々を言其らや、 園女
や花穴とさききく 輝ふ二、 東海
考らさる白柳さきききや、 海樂
うつ條や淋入るおる葉の細、 正月
接くくは水如くは作うれ、 在島女
端 〽や日望さくさく 〽在島、 尾臨
〽りはあゆの紙衣や青の匂、 新井
我能くをさるさく 〽さる白、 正徳女

つねに世の事や ありては ありては

○

世の事や ありては ありては ありては

世の事や ありては ありては ありては

世の事や ありては ありては ありては

世の事や ありては ありては ありては

世の事や ありては ありては ありては

○

世の事や ありては ありては ありては

世の事や ありては ありては ありては

世の事や ありては ありては ありては 一頁

世の事や ありては ありては ありては 総々

世の事や ありては ありては ありては 思及

世の事や ありては ありては ありては 為山

世の事や ありては ありては ありては 申す

世の事や ありては ありては ありては 以計

世の事や ありては ありては ありては 千字

世の事や ありては ありては ありては 漢例

世の事や ありては ありては ありては 権章

二四十一

魚鱗の由形を... 其の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨

少壺
丹
音
竹
立石
卓
立
又
有

世を... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨

水
石
黒

... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨

蒸
松
檀
香
古

... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨
... 骨の骨

古
山

月夜の静けさ

あふくさくさ

〜

豊か

あふくさくさ

あふくさくさ

江戸

江戸

あふくさくさ

あふくさくさ

あふくさくさ

